

大阪府 茨木市

# 倍賀遺跡発掘調査概要報告書

—平成4年度発掘調査概報—

平成5年3月



茨木市教育委員会



（上）遺跡周辺航空写真



（下）調査地周辺航空写真



(上) 第1工区造構全景



(下) 第2工区造構全景



(上) 大溝 (SR-01) 全景



(下) SD-18・SD-19 (土器廃棄溝) 全景

## はしがき

わがまち“いばらき”が位置する三島平野は、気候が温暖で、自然が豊かでありますので古くから人類がその足跡を残しております。

そのため市内には、銅鐸の鉢型が出土した、弥生時代の拠点的集落である東奈良遺跡をはじめてとして、紫金山古墳、將軍山古墳など、全国的に著名な遺跡があります。

近年、北大阪の中核都市として発展している茨木市においては、大規模な開発が増加しており、長らく地下で眠っていた、多くの文化財の顕在化を招き、保護・調査業務が急務となってきております。

今回、報告致します倍賀遺跡もその一つであり、弥生時代の方形周溝墓など、多数の遺構、遺物が検出されました。

これらは、本市の歴史にとって大切であるばかりでなく、北摂地方全体の歴史を探るうえでも、貴重な資料を得ることができましたので今後、各方面の研究に役立てていただければ幸甚であります。

後になりましたが、本発掘調査に深い御理解と惜しみない御協力をいただきました関係各位に深く感謝の意を表し、はしがきと致します。研究に将来とも役立てば幸いです。

平成5年3月31日

茨木市教育委員会  
教育長 村山和一

## 例　　言

1. 本書は、茨木市西田中町に所在する倍賀遺跡の発掘調査概要報告である。
2. 発掘調査は住友セメント佛茨木工場の敷地内における事務所付倉庫建設にさきだって行ったもので、同敷地内における第2次調査にあたる。現地の調査は平成3年9月2日から平成4年1月31日まで実施し、以後、平成4年3月末まで内業遺物整理を実施した。
3. 発掘調査ならびに内業遺物整理は、茨木市教育委員会社会教育課、濱野俊一、中東正之が担当した。
4. 現地調査及び内業整理にあたっては、調査補助員として下記の参加協力を得た。

藤田昌宏	多田みちる	大戸井和江
藤田明弘	小牧　　勲	早川博子
林　　和博	若林純也	西坂泰子
原口　　武	森木芳子	高橋公子
高瀬　隆治	峯松皓代	
耕田　さゆり	田中良子	
吉田　和美	桑原紀子	

5. 本書の作成・編集は、茨木市立文化財資料館、奥井哲秀の指導のもとに、濱野・中東がこれにあたった。本書を作成するにあたっては、出土遺物の実測を濱野・西坂・小牧・若林、各種図面・浄書は濱野、遺構・遺物写真は、中東・濱野が分担した。また、特別に拓本に関しては免山篤氏の協力をいただいた。全体の編集は、濱野が担当し本概要報告書執筆分担は文末に明記した。
6. 現地調査及び内業整理にあたって、下記の方々の種々の御協力、御教示を賜った。

免山　篤	(茨木市文化財保護委員)
井上　直樹	(元茨木市教育委員会)
森岡　秀人	(芦屋市教育委員会)
森田　克行	(高槻市立埋蔵文化財センター)
橋本　久和	(高槻市立埋蔵文化財センター)
古川　久雄	(六甲山麓遺跡調査会)
大塙　　隆	(名神高速道路内遺跡調査会)

- また、住友セメント佛・佛クキ・佛島田組・国際航業㈱の方々には、調査期間中を通じて種々の御協力をいただいた。(順不同、敬称略)
7. 本冊に使用した地図は、『茨木市都市計画図-1/2,500』及び『国土地理院地形図・高槻・吹田-1/25,000』である。

# 本 文 目 次

はしがき

例 言

	頁
第1章 地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
旧石器時代	1
縄文時代	3
弥生時代	3
古墳時代	4
歴史・中世・近世時代	5
第2章 倍賀遺跡及び周辺遺跡の既往の発掘調査	7
第3章 倍賀遺跡の発掘調査	
第1節 調査に至る経緯と経緯	20
第2節 検出遺構と出土遺物	21
第3節 ま と め	42

## 卷頭カラー図版目次

- 卷頭図版 I (上) 遺跡周辺航空写真  
(下) 調査地周辺航空写真
- 卷頭図版 II (上) 第1工区遺構全景  
(下) 第2工区遺構全景
- 卷頭図版 III (上) 大溝 (SR-01) 全景  
(下) SD-18・SD-19 (土器廃棄溝) 全景

## 搜 図 目 次

- 第1図 茨木市位置図
- 第2図 周辺遺跡分布図
- 第3図 春日神社「延慶2(1309年)」銘石灯籠
- 第4図 昭和48年度郡遺跡上穂積団地建設に伴う発掘調査風景(航空写真・南から)
- 第5図 郡遺跡・倍賀遺跡既往発掘調査位図
- 第6図 郡遺跡(KH・90-1)茨木市立中央図書館、落ち込み出土石刀実測図
- 第7図 郡遺跡(KH・90-1)茨木市立中央図書館、落ち込み出土韓式系土器実測図
- 第8図 郡遺跡(KH・90-1)茨木市立中央図書館、遺構平面図
- 第9図 郡遺跡(KH・90-1)茨木市立中央図書館、出土遺物(1)
- 第10図 郡遺跡(KH・90-1)茨木市立中央図書館、出土遺物(2)
- 第11図 郡遺跡(KH・90-1)茨木市立中央図書館、出土遺物(3)
- 第12図 倍賀遺跡(HK・91-1)発掘調査区地区割り図
- 第13図 倍賀遺跡(HK・91-1)第1遺構平面図
- 第14図 倍賀遺跡(HK・91-1)第2遺構平面図
- 第15図 倍賀遺跡(HK・91-1)方形周溝墓-9及びSX-02出土土器
- 第16図 倍賀遺跡(HK・91-1)方形周溝墓-10及び方形周溝墓-11出土土器
- 第17図 倍賀遺跡(HK・91-1)SK-08及びSK-13出土遺物
- 第18図 倍賀遺跡(HK・91-1)大溝(SR-01)中央セクション図
- 第19図 倍賀遺跡(HK・91-1)銅鐸形土製品実測図
- 第20図 倍賀遺跡(HK・91-1)石鎚実測図
- 第21図 倍賀遺跡(HK・91-1)大溝(SR-01)埋土中層出土土器
- 第22図 倍賀遺跡(HK・91-1)大溝(SR-01)埋土中層及び最下層出土土器
- 第23図 倍賀遺跡(HK・91-1)大溝(SR-01)埋土中層木製盤実測図
- 第24図 倍賀遺跡(HK・91-1)SD-18及びSD-19出土土器

## 図 版 目 次

- 図版1 (上) 第1工区遺構全景(航空写真)  
(下) 第2工区遺構全景(航空写真)
- 図版2 (上) 第1遺構面検出状況(北から)  
(下) SX-01(池状遺構)出土石製紡垂車出土状況
- 図版3 (上) 方形周溝墓-1検出状況(東から)  
(下) 方形周溝墓-2検出状況(東から)
- 図版4 (上) 方形周溝墓-3検出状況(東から)  
(下) 方形周溝墓-4検出状況(西から)
- 図版5 (上) 方形周溝墓-9土器出土状況(北から)  
(下) 方形周溝墓-9土器出土状況(北から)
- 図版6 (上) 方形周溝墓-10検出状況(東から)  
(下) 方形周溝墓-10土器出土状況(北から)
- 図版7 (上) 方形周溝墓-11検出状況(南から)  
(下) 方形周溝墓-11土器出土状況(西から)
- 図版8 (上) SX-02検出状況(南から)  
(下) SX-02出土遺物検出状況(西から)
- 図版9 (上) SX-02上部器覆出土状況(東から)  
(下) SX-02須恵器环身出土状況(東から)
- 図版10 (上) SK-13検出状況(南から)  
(下) SK-13磨形埴輪出土状況(東から)
- 図版11 (上) 大溝(SR-01)検出状況(全景)  
(下) 大溝(SR-01)木製盤出土状況(南から)
- 図版12 (上) SD-19土器群出土状況(北から)  
(下) SD-18土器群出土状況(北から)
- 図版13 倍賀遺跡(HK・90-1)出土土器(1)
- 図版14 倍賀遺跡(HK・90-1)出土土器(2)
- 図版15 倍賀遺跡(HK・90-1)出土土器(3)
- 図版16 倍賀遺跡(HK・90-1)出土土器(4)
- 図版17 倍賀遺跡(HK・90-1)出土木製品(5)
- 図版18 倍賀遺跡(HK・90-1)出土土器(6)
- 図版19 倍賀遺跡(HK・90-1)出土土器(7)
- 図版20 倍賀遺跡(HK・90-1)出土土器(8)



# 第1章 地理的・歴史的環境

## 第1節 地理的環境

茨木市は、大阪府の北東部に位置し、南北17.3km、東西8.6kmの南北に長く、東西に短い市域を形成している。また、当市の面積は、76.56km<sup>2</sup>、人口は25.3万人で北摂地域の中核的都市として発展している。周辺の市町としては、東を高槻市、南と南西に摂津市と吹田市、西と北西に箕面市と豊能町そして、北は、京都府龜岡市に接している。

茨木市の地理的特徴としては、大きく見て北半部は山地・丘陵で南半部は平野になっている。北半部の山地は丹波高原の南端にあたり、標高300m前後のかなり緩やかな山々が起伏して、丹波と同じく隆起準平原の名残をとどめ、北摂山地と呼ばれている。この山地をつくる主な地層並びに岩石は、丹波帯とよばれる古生層に属するチャートや砂岩、泥質岩、あるいは輝緑凝灰岩といった古い時代の岩石で構成されている。そして北摂山地の裾部にかけては、砂礫や粘土で構成している大阪層群からなる丘陵地帯、低位段丘が発達している。また、西には、前期洪積層の隆起地形である標高50~100m前後の千里丘陵がある。南半部の平野は、淀川及び安威川・佐保川・勝尾寺川・元茨木川（現在廢川）などの市内を流れる主要河川によって形成された扇状地及び沖積平野が広がり、三島平野を形成している。



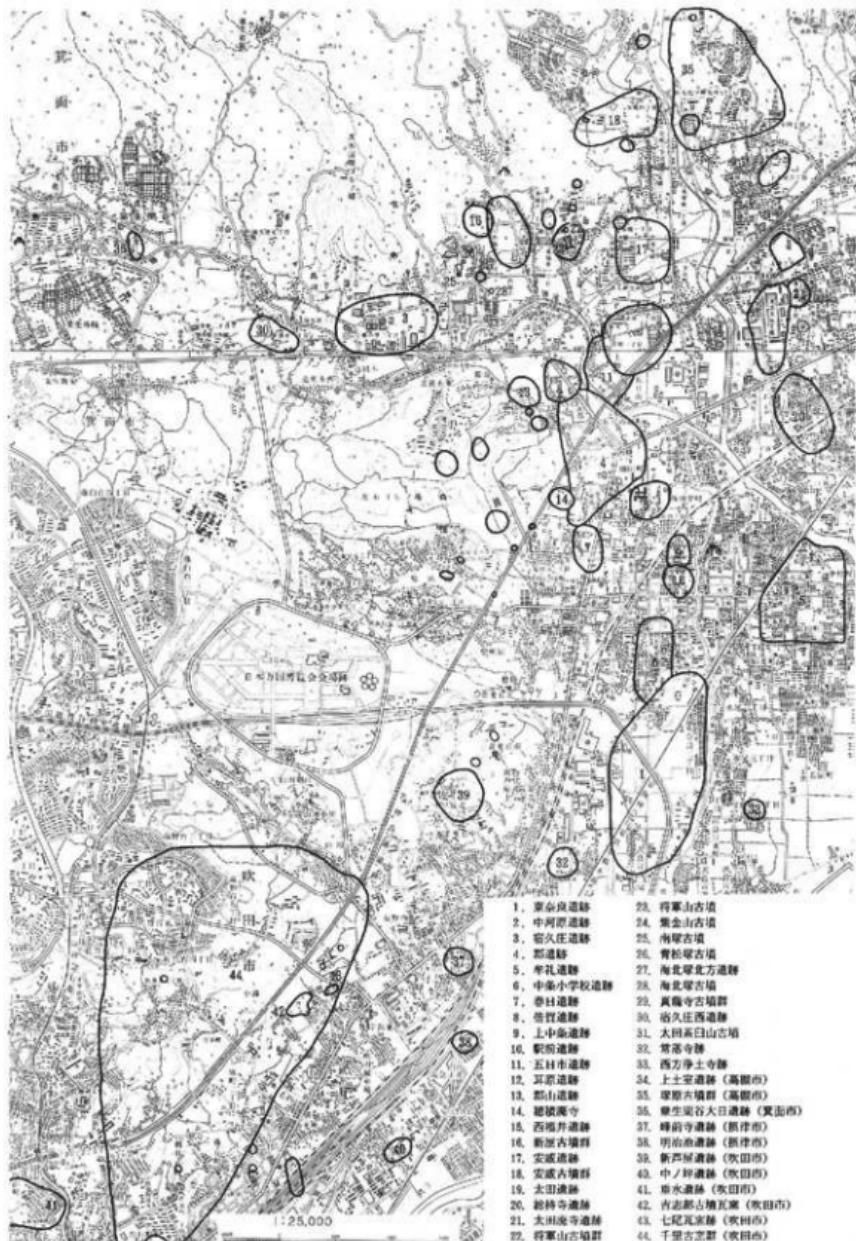
第1図 茨木市位置図

## 第2節 歴史的環境

淀川中・下流域北岸に位置する茨木市は、北摂地域の中でも有数の遺跡分布地帯である。このことから人々が早くから住みはじめていることが、近年の発掘調査などで序々に明らかになりつつある。以下最近の発掘調査による成果を踏まえながら、茨木市と周辺の遺跡について時代ごとに概観してみたい。

### 旧石器時代

北摂地域に入々が定着するようになるのは、旧石器時代からである。この時代の市内の遺跡は、山麓部の初田遺跡そして丘陵部裾の太田遺跡・耳原遺跡・安威遺跡・郡遺跡等で表面採集や後世の遺物包含層から、ナイフ形石器・有舌尖頭器が単独又は数点発見されているが内容的には不明な点が多い。また、最近では、沖積地に立地している東奈良遺跡に



1. 東条鉄道跡
2. 中河原道路
3. 宿久庄道路
4. 郡道路
5. 半乳道路
6. 中条小学校道路
7. 巻日道路
8. 佐賀道路
9. 上山桑道路
10. 船所道路
11. 五日市道路
12. 草原道路
13. 郡山道路
14. 篠根渓谷
15. 西端井道路
16. 新原古墳群
17. 安威道路
18. 安威古墳群
19. 太田道路
20. 駒持寺道路
21. 太田塙寺道路
22. 待軍山古墳群
23. 待軍山古墳
24. 紫金山古墳
25. 南堀古墳
26. 青松原古墳
27. 海北堀北方古墳
28. 海北堀古墳
29. 真龍寺古墳群
30. 佐久庄西道路
31. 太田系曰山古墳
32. 常落寺跡
33. 西方淨土寺跡
34. 上土室古墳群 (高根市)
35. 麻原古墳群 (高根市)
36. 麻生完谷大日古墳 (東山市)
37. 稲持寺古墳群 (新津市)
38. 明治酒造跡 (新津市)
39. 新戸屋古墳群 (次田市)
40. 中ノ坪古墳群 (次田市)
41. 重水古墳群 (次田市)
42. 吉志郡古墳古窯 (吹田市)
43. 七尾瓦窯跡 (吹田市)
44. 千里吉古窯跡 (吹田市)

おいてもナイフ形石器が数点発見されている。

周辺地域では、高槻市の郡家今城遺跡において疊群や石器群が検出されている。他に塚原遺跡・津之江南遺跡・郡家川西遺跡などからも、ナイフ形石器や有舌尖頭器が検出されており、安威川東岸を中心に旧石器時代の遺跡が見つかっている。また、吹田市吉志部遺跡においてもナイフ形石器・有舌尖頭器・搔器が検出されており、垂水遺跡ではナイフ形石器や石核等が確認されている。そして、箕面市粟生間谷（奥地区）において、有舌尖頭器が単独に発見されている。

#### 縄文時代

茨木市を含めた北摂地域では縄文時代の遺跡は少なかったが、ここ十数年来の開発に伴う発掘調査によって縄文時代の遺跡が増加している。市内の縄文時代の遺跡の中である程度様相が判明している遺跡として、耳原遺跡がある。耳原遺跡は、安威川と佐保川に挟まれた舌状台地に立地しており、晩期の滋賀里Ⅲ式期から長原式期までの壺（深鉢）棺墓が16基が検出されている。また、安威川右岸の牟礼遺跡では、自然流路および井堰・水田が検出され、自然流路から若干の晩期（滋賀里Ⅲ式～IV式・船橋式もしくは長原式）の縄文土器が出土している。他に山麓部の初田遺跡や西福井遺跡・太田遺跡においても縄文土器が出土している。また、東奈良遺跡においては、前期末（大歳山式）爪形文（C字）土器や晩期後半（大洞AないしA'式に平行）の浮線文土器そして石棒が出土していたが、最近の発掘調査で晩期後半の船橋式と長原式の深鉢片が出土している。また、郡遺跡において石刀が出土している。今後、縄文土器などが出土する可能性が高いと思われる。

周辺地域では東の高槻市宮田遺跡において後期および晩期終末の土器が落込みから一括出土している。他に安満遺跡・郡家川西遺跡・塚原遺跡・塚穴遺跡・天神山遺跡などで縄文土器が出土している。そして淀川河床に立地している柱本遺跡や大塚遺跡からも早期から晩期にかけての縄文土器が出土している。また、最近の発掘調査で芥川遺跡から後期（北白川上層式でも古い時期が中心）の土壤や土器棺が検出されている。南西の吹田市吉志部遺跡において晩期後半の突帯文土器が落込みから出土しており、西の箕面市には学史的にも著名な瀬川遺跡があり、前期（北白川下層式）と後期（元住吉山・宮滝式）の土器と石器が出土している。また、新稻・如意谷・白鳥の各遺跡においても、縄文土器や石器が出土している。

#### 弥生時代

弥生時代にはいると、茨木市を含む北摂地域において遺跡数が増加する。北部九州より中部瀬戸内を東進してきた初期水稻農耕を始めとする弥生文化は、大阪湾から淀川を北上し、北摂地域に急速に広がっていく。

大阪湾から淀川を北上しそして安威川を遡上してきた弥生文化は、まず最初に低湿地に近い東奈良遺跡・目垣遺跡に集落を形成する。そして後、前期末には同河川の形成された扇状地の左右両岸に位置する耳原遺跡・郡遺跡にも集落を形成する。

中期及び後期になると、市内の主要河川の安威川・佐保川・勝尾寺川の両側及び丘陵部や山間部にまた新たに集落を形成するため、遺跡数が急激に増加する。また、耳原遺跡・郡遺跡そして東奈良遺跡などでは、集落規模が大きくなり、近くに分村する遺跡も現れる。

新たに集落を形成する遺跡としては、見付山遺跡・上中条遺跡・太田遺跡・溝脇遺跡や高地性集落である石堂ヶ丘遺跡などがあり、郡遺跡の分村として考えられるのは、倍賀遺跡・中河原遺跡そして東奈良遺跡では、中条小学校遺跡などが成立するものと思われる。

周辺地域では、北部の高槻市には前期から始まる安満遺跡がある。安満遺跡は、旧桧尾川左岸の扇状地に立地しており、東奈良遺跡と同じく拠点的集落と考えられる。

また、平野部には、郡家川西遺跡・芥川遺跡・そして北摂山地から派生する尾根上及び丘陵上には、高地性集落である古曾部遺跡・芝谷遺跡・紅葉山遺跡や天神山遺跡があり、中期の集落と銅鐸が出土している。

南西部の吹田市では、千里丘陵南端部に高地性集落である垂水遺跡があり、その眼下の低地部には垂水南遺跡がある。北西部の箕面市は、弥生時代の遺跡は少ないが、箕面川左岸の池ノ内遺跡から中期後半の土器が整地層からまとまって出土している。また、千里丘陵東端の吹田市山田別所及び箕面市如意谷遺跡から、銅鐸が単独出土している。

#### 古墳時代

古墳時代には、北部の山麓と千里丘陵裾に多くの古墳が築造される。まず、前期古墳として著名な紫金山古墳、そして将軍山古墳が相次いで山麓部に築造される。両古墳とも全長100m程の前方後円墳で、後円部中央に、堅穴式石室がある。後円部の堅穴式石室には、断面U字形の粘土棺床をそなえ割竹形木棺があったと推定されている。

特に、紫金山古墳の堅穴式石室からは、12面の鏡の他、貝製の鉄形石・車輪石・筒形銅器等の多種多様な副葬品が出土している。続いて前期末には直径約10mの円墳である安威0号墳及び全長約45m程の前方後円部の安威1号墳が築造される。両古墳とも、割竹形木棺をいれた粘土棺が2基検出されている。

中期にはいると、全長226m・後円部径138mの前方後円墳である、太田茶臼山古墳（総体天皇陵）が築造される。また最近の発掘調査の結果、太田茶臼山古墳（総体天皇陵）に先行して築造されたと推定される、太田石山古墳がある。

後期になると、市内ではセツも早く横穴式石室を導入した青松塚古墳を初めとして南塚古墳、そして海北塚古墳が築造される。そして、山麓部を中心に横穴式石室を主体とする、新屋古墳群・安威古墳群・将軍山古墳群・長ヶ瀬古墳群などの横穴式石室を主体とする群集墳が出現する。また、大形単独墳である耳原古墳や後期末から終末期にかけての初田古墳・上寺山古墳・阿武山古墳が築造される。

最近では、平地部の駅前遺跡・郡遺跡などで、墳丘を削平された埋没墳が多数見つかっており、主体部は、横穴式石室の痕跡が認められないため木棺直葬と考えられている。

古墳時代の集落遺跡としては、弥生時代から引き続いている郡遺跡・倍賀遺跡・宿

久庄遺跡・中条小学校遺跡などがある。特に東奈良遺跡では、前期初頭にかけて再び集落規模が大きくなり、幅7~10mの大溝が掘られたり、多くの他地域の搬入土器が出土している。また、新たに成立した集落遺跡としては、上中条遺跡などがある。

周辺地域としては、東部の高槻市域で前期から弁天山A1号墳・B1号墳・C1号墳が順次築かれ、続いて郡家車塚古墳・前塚古墳が築造される。特に4世紀末に築造されたと推定される郡家車塚古墳までは、いずれも前方後円墳であるが5世紀前半の前塚古墳は、凝灰岩製の長持形石棺を出土しているながら墳形は帆立貝式古墳になっている。

中期から後期にかけて、前方後円墳の墓谷2号墳・墓谷4号墳が築かれると、6世紀段階になると星神車塚古墳・中将塚古墳・そして郡家今城塚古墳が築造される。

また、塚原古墳群・塚脇古墳群・櫛原古墳群など横穴式石室を主体とする群集墳が形成され、集落遺跡も弥生時代から安満遺跡・大藏司遺跡・芥川遺跡などが引き続いで存続する。特に土室の新池遺跡では、5世紀中頃から6世紀中頃にかけての18基の埴輪窯と大形埴輪工房が3棟および埴輪工人の集落も検出されている。

南西部の吹田市においては、前期古墳と推定される垂水西原古墳や後期の出口古墳・吉志部古墳そして新芦屋古墳などがある。しかし、大型前方後円墳や群集墳などは形成されなかったが、千里丘陵東部を中心に千里古窯跡群と呼ばれる大規模な須恵器窯が多数築造される。また、集落遺跡としては、吉備・山陰・北陸・東海地方等の他集落からの多くの搬入土器が出土している垂水南遺跡や藏人遺跡などがある。

北西部の箕面市も、前期から中期にかけての古墳は見当たらず、後期の中尾塚古墳・桜塚古墳・大谷塚古墳など大型単独墳が点的に分布している。集落遺跡としては、前期の堅穴式住居跡が検出された池ノ内遺跡や町田遺跡などがある。

#### 歴史・中世・近世時代

律令時代にはいると、北摂地域は、嶋上郡・島下郡・豊嶋郡の3郡に分かれ、茨木市域は嶋下郡に属するようになる。嶋下郡は、新野・宿人(久)・安威・穂積の4郷からなり、嶋下郡衙は、旧山陽道(西国街道)沿いの郡か郡山付近にあったと推定されている。近年の郡遺跡周辺での発掘調査では、奈良時代から平安時代にかけての建物跡などが検出されているが、郡衙跡と考えられる造構や遺物は、発見されていないものの近隣の高槻市では嶋上郡衙が検出されており、今後郡遺跡周辺で嶋下郡衙が発見される可能性が高いと思われる。

また、この地域を統率していた有力氏族の寺院としては、飛鳥時代末期から奈良時代にかけて創建された太田廃寺・穂積廃寺がある。特に太田廃寺からは、塔婆心礎及び舍利容器一具、そして複子葉弁文軒丸瓦・忍冬唐草文軒平瓦などが出土している。その他に安威の大鐵冠山から単独で凝灰岩の石櫃の中から三彩釉有蓋壺の蔵骨器が発見されており、平安時代前期になると、忍頂寺と總持寺が相次いで建立されている。

近隣の千里丘陵東南部においては、聖式朝難波宮の造宮瓦窯跡である七尾瓦窯跡、及び

平安宮造宮瓦窯跡である吉志部瓦窯跡が相次いで営まれる。

摂津国は、古くから藤原氏の勢力の強い土地で、平安時代には、茨木市内の多くは摂関家の藤原氏の荘園であった。しかし、中世になると藤原氏の勢力が衰え、荘園領主の氏神や氏寺であった春日大社・興福寺に移り、両寺社の荘園支配は、室町時代15世紀半ばまで続いている。中世にかけての集落遺跡としては、郡遺跡や東奈良遺跡などで掘立柱建物跡や井戸が検出されているが、特に最近の発掘調査では宿久庄遺跡で9世紀後半から10世紀頃の掘立柱建物と13世紀後半から末葉の掘立柱建物が、多数検出されている。

そして茨木川左岸に立地する玉櫛遺跡が最近発見され、平安時代後半から室町時代前半(14世紀)にかけての掘立柱建物跡や水田などが検出されており、今まで不明であった市内の中世集落の様相が少しづつ判明してきている。

近隣の高槻市では宮田遺跡・上田部遺跡・上牧遺跡などで掘立柱建物・井戸・墓などで後世された中世集落が多数検出されており、箕面市の如意谷遺跡や吹田市の都呂須遺跡でも中世集落跡が確認されている。

また、山間部には中世墓地が点在しており、特に90基の墓と火葬場が検出されているクルス山中世墓地や伏原中世墓地などがあり、近隣の高槻市では、岡本山古基群がある。

中世から近世初頭にかけては、茨木城をはじめとして、太田城・福井城などの平城あるいは平山城や山間部には、佐保城や泉原城などの山城が築造されている。

(濱野)

＜参考文献＞

1. 茨木市史
2. 吹田市史・第1巻、第8巻別冊
3. 高槻市史・第1巻本編I・第6巻考古編
4. 箕面市史・第1巻
5. 大阪府史・第1巻古代編I
6. 東奈良遺跡調査会『東奈良 発掘調査既報I・II』1979年・1981年
7. 茨木市教育委員会『昭和60年度～平成3年度発掘調査既報』
8. 茨木市教育委員会『わがまち茨木 城郭編・古墳編』
9. 茨木市教育委員会『茨木の歴史と文化遺産』1986年
10. 茨木市教育委員会『茨木の史跡』1983年
11. 大阪府教育委員会『嶋上郡衙発掘調査概要』1971年
12. 大阪府教育委員会『東奈良遺跡発掘調査概要I・II』1976年・1989年
13. 大阪府教育委員会『玉櫛遺跡現地説明会資料』1991年
14. 高槻市教育委員会『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要I～IV』
15. 高槻市教育委員会『高槻市文化財年報、昭和61年度～平成元年度』
16. 吹田市教育委員会『埋蔵文化財緊急発掘調査既報・昭和55年度～平成3年度』
17. 如意谷遺跡調査団『如意谷遺跡』1982年
18. 野上丈助『摂津の古墳』

## 第2章 <sup>へ</sup><sub>か</sub>倍賀遺跡及び周辺遺跡の既往の発掘調査

倍賀遺跡は、茨木市のはば中央部に位置し、千里丘陵より派生した段丘の最先端部と茨木川の形成した氾濫平野に立地している。この地域は、市内でも遺跡が数多く点在する地域で南部の東奈良遺跡に相対して郡遺跡を中心に遺跡群を形成している。倍賀遺跡は、この郡遺跡を中心に形成している遺跡群の一つである。

昭和45年に高槻市郡家で嶋上郡衙跡が発見され、奈良時代の掘立柱建物跡や「上郡」と墨書きされた土師器が井戸から出土しており、国史跡に指定されている。このため昔から郡と呼ばれていたこの地域が嶋下郡の郡衙跡があったと考えられており、近隣には、「日本書記」にみられる古代氏族の穗積臣・穗積朝臣の氏族寺院である穗積廃寺跡があり、この地域一帯が、「倭名抄」における穗積郷であると考えられている。

また、本遺跡内に所在する春日神社には、重要文化財に指定されている「延慶2(1309年)」銘の鎌倉時代作の石灯籠があり、そして倍賀から春日にかけて倍賀寺があったと伝えられており、歴史的にも重要な地域として認識されていた。

しかし本遺跡を含め周辺の地域は、戦前から土器や石器などの遺物が広範囲に散布していたことが地元の人々によって知られていたが、本格的な発掘調査が実施されたのは、戦後になってからである。特に昭和29年に、郡神社の南側の丘陵を切り開いて児童公園を造成中に、弥生土器(畿内第V様式)が出土したために遺跡として周知されるようになった。

その後約10年後の昭和38年に、名神高速道路建設に伴って茨木インターチェンジにあたる場所を2ヶ所試掘調査している。調査の結果、現地表下75cmのところから弥生時代後期(畿内第V様式)の甕・高壺などの土器が出土している。

昭和37年に、上中条町において市内を流れる小川の改修工事中に6世紀初頭の須恵器や土師器及び弥生時代後期末から庄内式にかけての土器が出土したために遺跡として周知されるようになり、また、今回の調査対象となった倍賀遺跡及び春日遺跡内に含まれる春日神社付近から春日丘高校に至る地域が、須恵器の散布地帯として認識されるようになった。

郡遺跡を中心に、本格的に発掘調査のスケールが入ったのは昭和48年度からで、茨木インターチェンジの南側、現在の大坂府住宅供給公社上穂積団地建設に伴う発掘調査で、昭和48年の6月から翌年の3月にかけて、約20,000m<sup>2</sup>を調査実施している。

この発掘調査の結果、弥生時代中期から後期の方形周溝墓、堅穴住居跡、井戸、古墳時代中期から後期の墳丘削丘された埋没墳が10数基、そして馬を埋葬した墓などが検出された。また、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物跡や南北に延びる溝などが検出さ



第3図 春日神社「延慶2(1309年)」銘石灯籠



第4図 昭和48年度郡遺跡上穂積団地建設に伴う発掘調査風景（航空写真・南から）

れたが、郡街跡を直接証明できる遺構や遺物は、発見できなかった。

上記の発掘調査以降、郡遺跡を中心とする遺跡調査が本格的となり、調査も継続的に実施され調査件数も毎年増加する。このため、昭和48年以降は、郡遺跡および周辺の遺跡調査のうち、主要な調査と倍賀遺跡の既往の調査を中心に記述することにしたい。

昭和48年度に、郡遺跡の上穂積2丁目において市立西幼稚園建設に伴っての発掘調査が実施され、弥生時代中期（畿内第II様式）の方形周溝墓1基と埋葬主体の一部である土壙墓2基を検出している。また、多数の土壙群と掘立柱建物跡も検出している。この調査の結果、茨木インターチェンジの南側、上穂積4丁目から2丁目にかけての広い範囲に弥生時代中期の方形周溝墓を主体とする墓域がひろがっていることが判明した。

昭和52年度には、郡遺跡の畠田町において、市立畠田小学校建設が計画され、試掘調査を実施したところ、古墳時代の遺物包含層が検出された。当時、この地は郡遺跡の中心とみられる處から東へ離れていたが、古墳時代の遺物包含層が検出されたことにより、郡遺跡の遺跡範囲が東へ大きく広がることとなった。そして本調査は、校舎2棟と体育館1棟が調査対象となり、A・B・Cの3つの調査区を設定して実施している。調査の結果、A地区では弥生時代中期の方形周溝墓を5基、4間×3間の掘立柱建物跡（時期不明）が1棟そして溝、土壙などが検出されている。B地区では、6世紀末から7世紀前半の井戸が2基、弥生時代後期後半の方形周溝墓1基を含む4基そして溝、土壙などが検出されてい

る。

C地区では、6世紀前半の堅穴住居跡が1棟、そしてヘラで「大」と陰刻された須恵器の瓶子が出土した8～9世紀の井戸が1基検出されている。また、A地区の遺物包含層から、滑石製子持匁玉や韓式系土器が出土している。

上記の調査以後は、郡遺跡を中心に調査面積も500m<sup>2</sup>以下的小規模な発掘調査が増加する。こうした小規模な調査は、点的調査のため郡遺跡群の全体の様相を把握するまで至らなかつたが、多くの新たな知見を得ることができた。

特に倍賀遺跡及び春日遺跡など、今まで発掘調査が実施されていなかった地域にも調査が実施され、新たに中河原遺跡などが発見されたりした。

また、郡遺跡から春日遺跡にかけて5世紀中頃から6世紀の前半にかけての円墳を主体とする埋没墳が多数眠っており、弥生時代の方形周溝墓群とともに、低地部の不明だった古墳についても様相が少しづつ判りつつある。

以下、主要な調査を列記すると、中河原遺跡は、昭和55年度から同56年度にかけて関西電力資材センターにおいて調査され、弥生時代中期（第Ⅲ様式）方形周溝墓が検出され、弥生時代中期に郡遺跡の分村として成立したと推定されることとなり、中・近世にまでわたる複合遺跡であることが判明している。

郡遺跡においては、昭和55年度に上穂積2丁目において、西地区公民館建設に伴い発掘調査が実施されている。当該地は、先の市立西幼稚園の西側隣接地で調査面積も480m<sup>2</sup>と比較的大きく調査された。調査の結果、5世紀中頃から後半にかけての墳丘を削丘された埋没墳が1基検出されている。その後、昭和57年度に、郡4丁目において倉庫建設に伴う発掘調査で柱穴が多数検出されたのを初めとして、昭和60年度には上穂積2丁目における店舗付事務所建設に伴う発掘調査では、奈良時代の掘立柱建物と溝及び弥生時代中期（第Ⅲ様式）の溝を共有した方形周溝墓3基も検出されている。また五日市緑町では、ビジネスホテル建設に伴う調査で、奈良時代の溝が検出されている。

春日遺跡では、昭和56年度に春日2丁目において相次いで発掘調査が実施され、5世紀中頃から後半にかけての墳丘を削平された、埋没墳の一部が検出されている。

その後、昭和60年度には、郡遺跡の南限に隣接する春日2丁目において、奈良時代の溝や埴輪片を含む古墳時代から奈良時代にかけての包含層を検出している。そして上穂積東町においての共同住宅建設に伴う調査では、12世紀頃の溝などが検出されている。

今回報告する倍賀遺跡の本格的な調査は、昭和61年度に春日保育所に伴う発掘調査で、場所も同じ西田中町で隣接地での調査である。調査は、部分的なトレンチ調査であったが、弥生時代中期の方形周溝墓や弥生時代後期及び古墳時代後期（6世紀）の溝の一部が検出されており、今回の調査にあたっての有力な参考資料となった。

こうした状況下で、昭和61年の12月には、今回報告する住友セメント拂茨木工場内において試掘調査が実施されている。試掘調査の結果、遺物包含層及び溝らしき落込みが検出



第5図 郡遺跡・倍賀遺跡既往発掘調査位図

され、住友セメント備茨木工場の敷地内にも遺跡が広がっていることが確認された。

試掘調査の結果に基づき、住友セメント備茨木工場敷地東側半分で施設の建設に伴って発掘調査が実施されたが、既設建物の間を抜った調査となり、大半がトレンチ調査となつた。調査の結果、弥生時代中期の方形周溝墓の一部が検出されたみたいである。(第1次調査)

その後も、倍賀遺跡及び周辺の遺跡で試掘調査や発掘調査などが実施されたが、今回の調査地の至近地に位置する市立中央図書館建設に伴う調査が、もっとも関連性が強いと思われる。

調査地点は郡遺跡の南東部にあたる畠田町で、この調査は、調査面積が約3000m<sup>2</sup>におよび、周辺の調査の中でもっとも広い。また、造構・遺物とも今回の調査地点と関連するものが多数検出されており、今回の調査においてたいへん重要な参考調査となつた。

最後に、現在未整理の状況であるが、調査成果の概略の一部を掲げておきたい。

発掘調査は、平成2年2月に実施された試掘調査によって、調査地全域に平均50cm以上の弥生土器・土師器・須恵器などを多量に包含した層と、溝状造構・柱穴等が検出されていた。この試掘結果にもとづき、同年7月から9月末までの3ヶ月の短期間で調査面積2830m<sup>2</sup>を発掘調査することとなつた。

調査にあたっては、茨木市道路座標軸を使用し9m×9mのグリッドで地区割を設定し調査をすすめた。また、調査地の平均標高(東京湾標準高使用)は15mを測る。

本調査の結果、試掘調査で検出されていた遺物包含層及び造構面は、時代別に3層及び3面あり、出土遺物も縄文時代から近世に及ぶ土器・石器などが多く出土した。しかしながら、本調査は調査期間等の事情から最終面にて全面造構検出することとなつた。

以下、主要な検出遺構と、図化した出土遺物の一部について簡略に述べる。(第6図～第7図)

検出遺構としては、弥生時代中期前半の土器が出土したSK-20がもっとも古いがF-4区の遺物包含層から弥生時代前期後半の広口壺(第11図-60)が検出されている。この広口壺は、全く磨滅しておらず、ほぼ完形に近い状態で出土したため、なんらかの造構に伴っていたものと思われる。出土した広口壺は、頸部および体部上半に多条ヘラ描沈線文を施しており、郡遺跡において、弥生前期後半には集落を形成していたことを示す資料となつた。

また、後の時代の造構からの出土であるが、縄文時代後期から晩期にかけての石刀の柄の部分(第6図)が出土しており、そして遺物包含層からも、石皿などが出土している。こうしたことから、今後、縄文時代後期から晩期にかけての造構及び遺物が出土する可能性が高いと思われる。

本調査地の本格的な造構の形成は、弥生時代後期になってからであり、特に調査地を南北に延びる環壕と推定される大溝は、郡遺跡では初見であり、大溝のすぐ外側(東側)には目立った造構は検出されず、大溝に流れ込んだ土層堆積状況から土塁が存在していた可能性が高いと思われる。そして、出土遺物(第11図-54～58)からは大溝の開削時期は不

明だが、弥生時代後期後半には、埋没して機能を失ったと推定している。

大溝の内側（西側）には、堅穴住居跡が1棟と井戸1基そしてSX-01（土器廃棄壙）等が検出されている。特にSE-06の最下層からは、一括の壺（第11図-61～63）が出土しており、井戸祭祀がおこなわれたと思われる。

また、SX-01は多量の土器（第11図-59）が投棄されており、特に甕を中心に出土している。

本調査地の主要な遺構のほとんどは、古墳時代後期の遺構が多く、E-5区を中心に広がっているSX-02（落ち込み）からは、古墳時代後期（5世紀後半から6世紀初頭）の須恵器や土師器が多量に出土している。（第10図-40～51）

また、胎土・調整から同一個体の破片と思われる輪式系土器が出土している。出土した破片は、繩席文叩きを施した後、螺旋状に沈線を1条めぐらす。内面は、丁寧な、ナデを施している。（第7図-1～3）

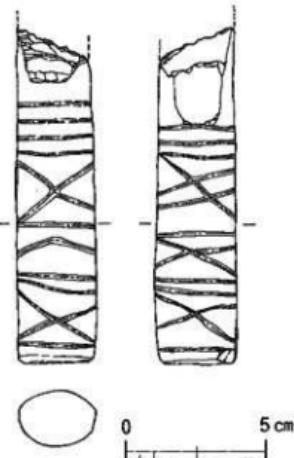
同時期の遺構としては、SE-07から須恵器の短頸壺や有蓋高壺などが一括出土している。

最後に単独で1基検出されたSE-05からは、和泉型瓦器椀・土師器皿・土師器鍋・東播系須恵器捏鉢・十瓶山窯と推定される須恵器の甕などが、一括出土している。この井戸から出土した和泉型瓦器椀は、12世紀中頃の瓦器椀で南河内における尾上編年のII-2に比定でき、他の遺物も年代的に大きく齟齬をきたさない様である。（第9図-1～39）

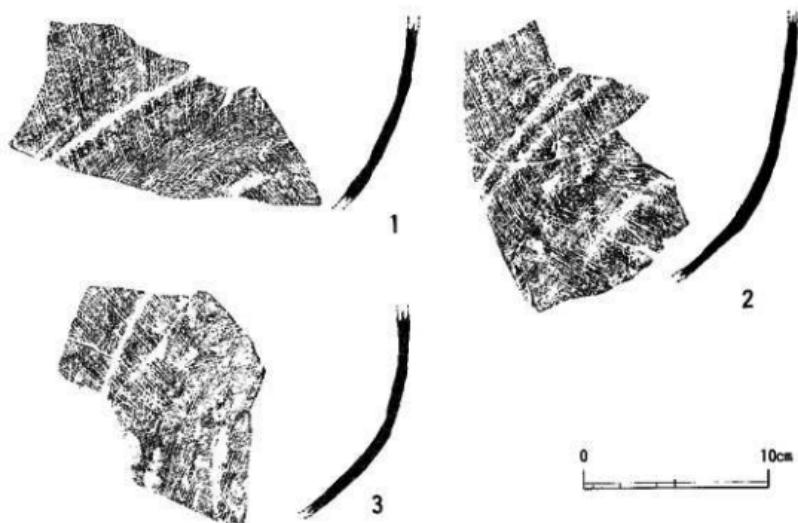
（濱野）

<註1>尾上実「南河内の瓦器椀」『藤沢一夫先生古稀記念文化論叢』1983年

<註2>高槻市立埋蔵文化センター 橋本久和氏御教示



第6図 郡遺跡（KH-90-1）  
茨木市立中央図書館、  
落ち込み出土石刀実測図

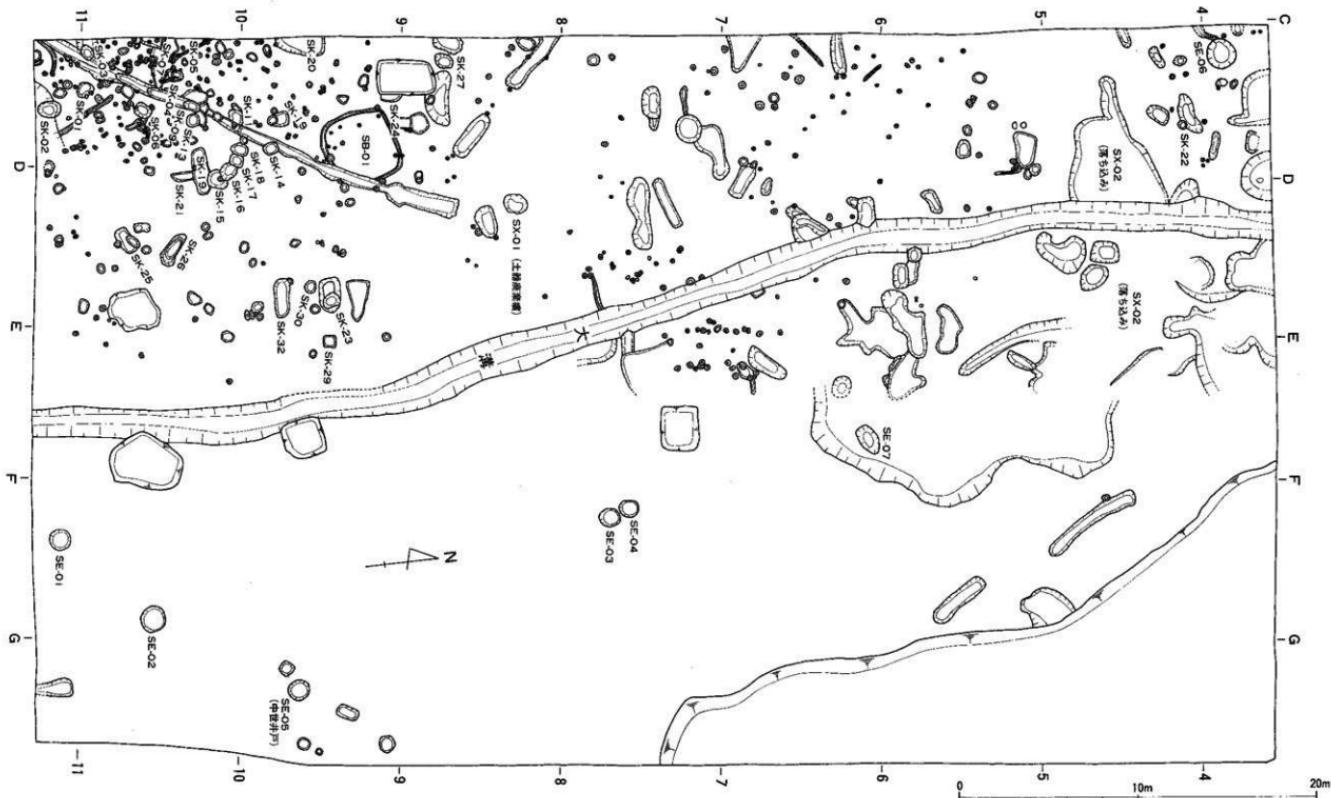


第7図 郡遺跡（KH・90-1）茨木市立中央図書館、落ち込み出土韓式系土器実測図

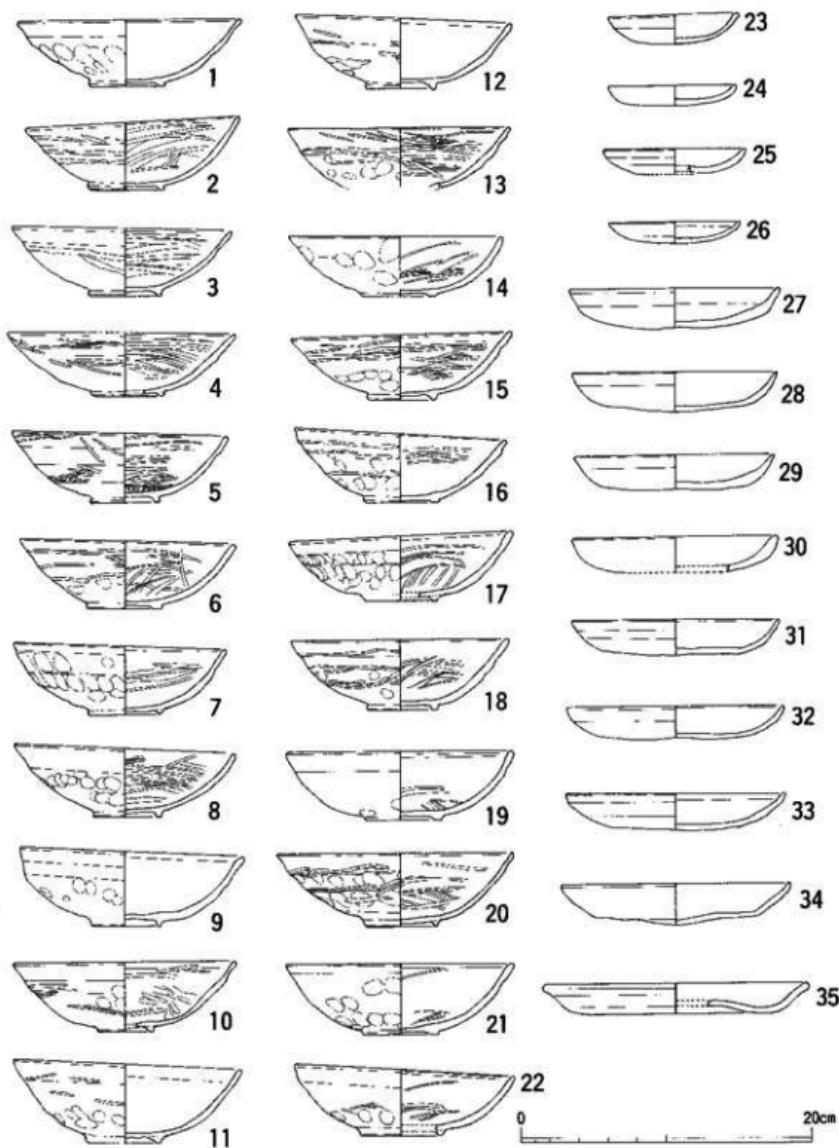
＜参考文献＞

1. 茨木市教育委員会『茨木市の文化財・調査資料第5集』1966年
2. 茨木市教育委員会『茨木の史跡』1983年
3. 茨木市教育委員会『茨木市郡遺跡発掘調査概報－上穂積・畠田地区－』1978年
4. 茨木市教育委員会『郡遺跡－西公民館建設予定地区発掘調査実績報告－』1980年
5. 茨木市教育委員会『春日遺跡－倅すかいらーくレストラン建設予定地発掘調査実績報告－』1981年
6. 茨木市教育委員会『春日遺跡－春日2丁目発掘調査実績報告－』1981年
7. 茨木市教育委員会『昭和60年度発掘調査略報』
8. 茨木市教育委員会『倍賀遺跡（春日保育所建設予定地内）現地説明資料』
9. 茨木市教育委員会『平成3年度発掘調査概報』1992年

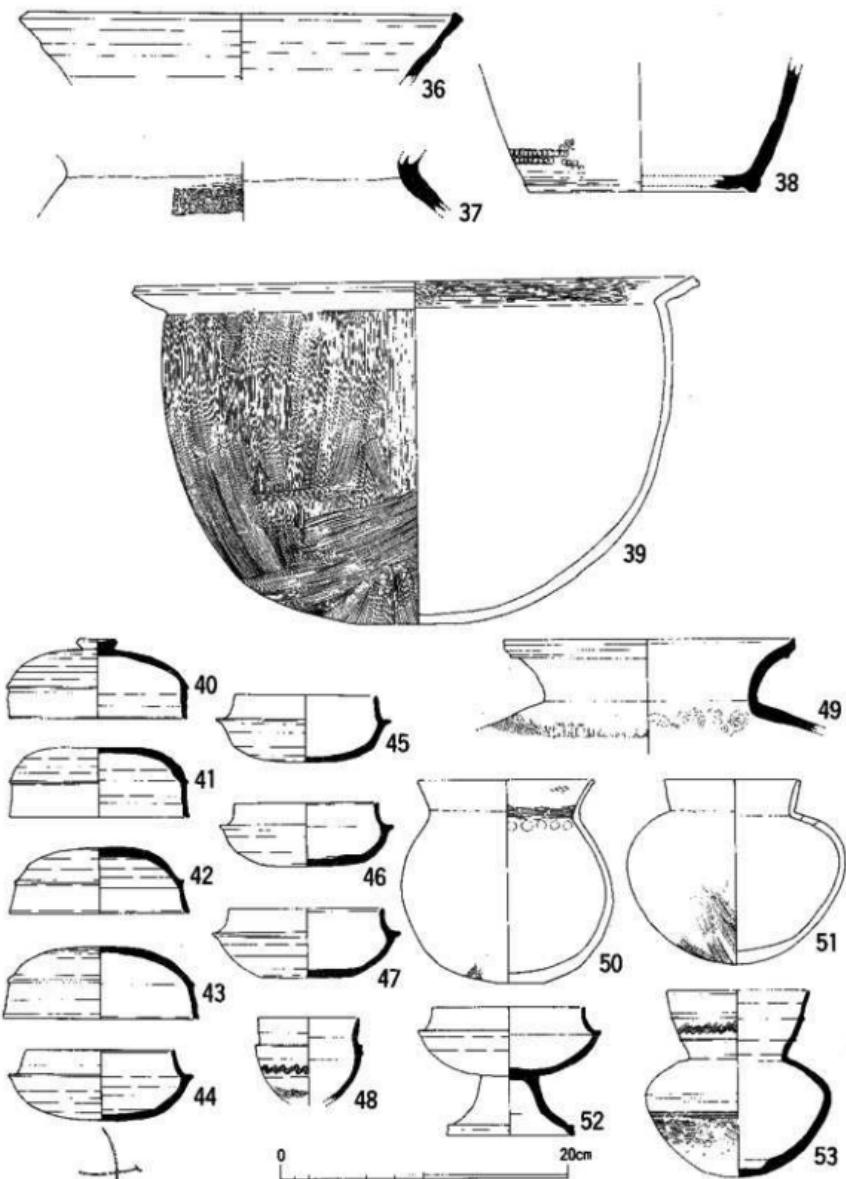




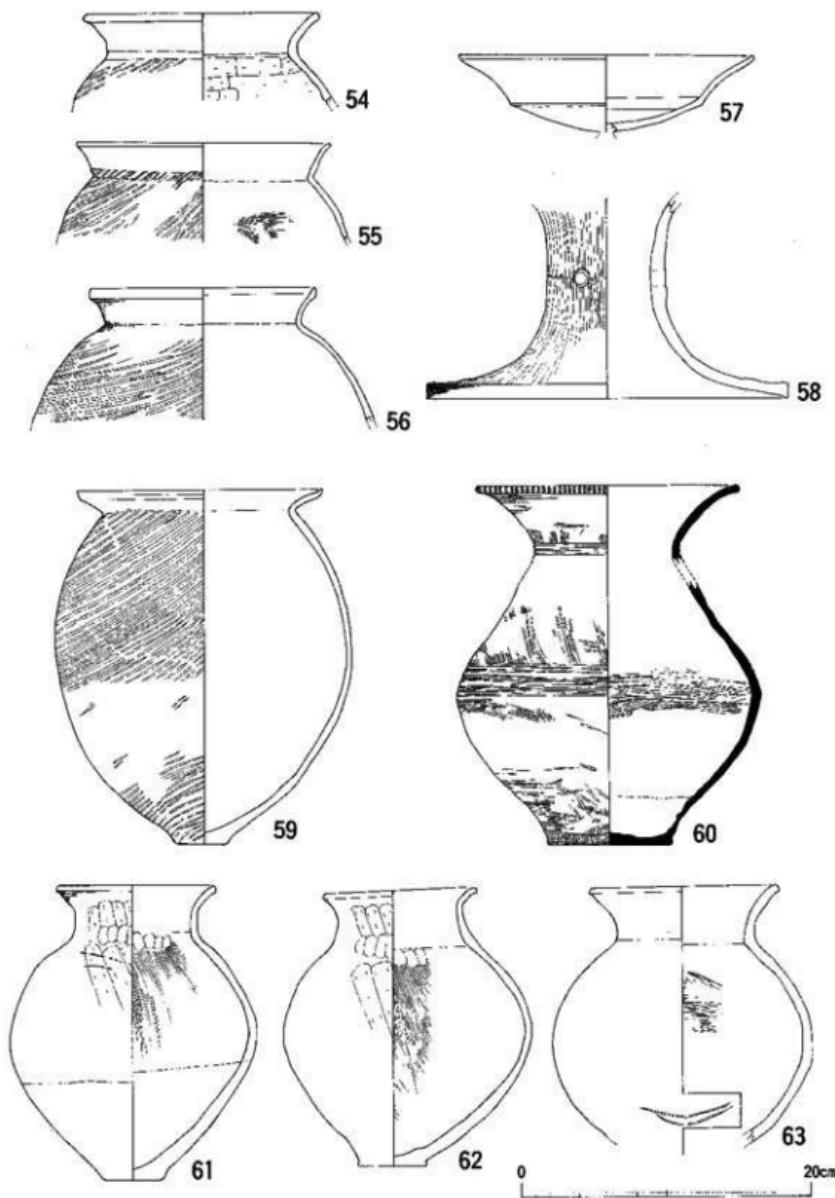
第8図 郡遺跡（KH-90-1）茨木市立中央図書館、遺構平面図



第9図 郡遺跡（KH・90-1）茨木市立中央図書館、出土遺物(1)



第10図 郡遺跡（KH・90-1）茨木市立中央図書館、出土遺物(2)



第11図 郡遺跡（KH・90-1）茨木市立中央図書館、出土遺物(3)

## 第3章 倍賀遺跡の発掘調査

### 第1節 調査に至る経緯と経過

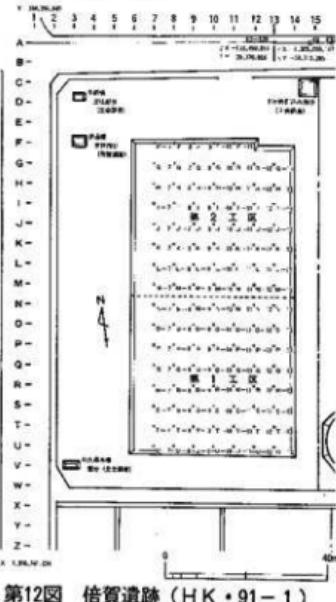
- 所在地 茨木市西田中町256-1
- 調査面積 3,000m<sup>2</sup>
- 調査原因 住友セメント㈱茨木工場内における事務所付倉庫建設
- 調査に至る経過

茨木市西田中町に所在する、住友セメント㈱茨木工場内において、倉庫建設が計画された。当該地は第2章の倍賀遺跡と周辺遺跡の既往の調査で前述のとおり、弥生時代から近世にわたる複合遺跡である倍賀遺跡の範囲内であることが周知されており、また、同工場内の敷地においても、試掘調査および第1次調査が実施されており、敷地内全域にわたって遺構・遺物の存在が予想されていた。そのため、今回の調査にあたっては、開発計画の段階から依頼者と茨木市教育委員会とが詳細に協議を重ね、試掘調査と第1次調査及び周辺の既往の調査データーを参考に、当該地の試掘調査を実施せずに、既設建物解体工事終了後にすぐに、本調査を平成3年9月1日から実施することとなった。

#### 5. 調査の方法

調査にあたっては、倉庫建設予定地3,000m<sup>2</sup>を対象としたが、調査期間中、倉庫建設予定地にはいる歩道橋の支柱部分や下水管引込み部分など調査対象面積が若干増加している。また、試掘調査と第1次調査のデーターから、当該地には、最低1m近い盛土と既設建物解体工事時のコンクリートなどの残土があることがわかっているため、盛土と残土については、重機で掘り下げ、排土については、調査地を2つに分割し、排土を敷地内で反転して場内処理することとなった。このため南側半分を第1工区そして北側半分を第2工区とし、第1工区から着手することとなった。そして、重機掘削後は、人力による遺物包含層掘削及び遺構精査を実施した。調査にあたっては、茨木市道路座標軸（国土座標平面直座標系VI）を使用して、5m×5mグリッドを設定しておこなった。（第12図）標高は、東京湾海拔（TP）を使用した。また、調査面積も広く、ヘリコプターによる空中撮影も実施した。

（濱野）



倍賀遺跡 (HK-91-1)  
発掘調査区地区割り図

## 第2節 検出遺構と遺物

### 1 基本層序

当調査地は、搅乱が多いものの、土層については、調査区の西側および北側壁面ではほぼ良好な形で観察された。基本層序は、普遍的にみられる6層とした。

第1層 盛土。工場解体時の造成土。	70～140cm
第2層 黒灰色土。旧耕土。	10～30cm
第3層 灰色砂質土。床土。	5～20cm
第4層 黄灰～灰褐色の砂質土。ほぼ全域に広がる。奈良時代～中世の包含層。 遺物の出土量は少ない。	5～30cm
第5層 茶褐～暗褐色の粘質土・砂質土。弥生時代中期～古墳時代の包含層。 全域に広がるが、中世の段階で削平を受けており、第1工区南部など では漸減、消滅する。	0～25cm
第6層 黄色～黄灰色の粘土・粘質土・シルト。粘土・粘質土を基調に、砂を 含み、礫も散見される土層で、第1工区西部ではシルトが優勢である。 全域に広がるが、第1工区中央部から第2工区東部にかけては欠如し ている。	0～25cm
第7層 黄灰色の粗砂・礫。地山層。全域に広がる。第1工区中央部から第2 工区東部にかけての堆積が顕著である。	100cm以上

### 2 主要な遺構と遺物

#### 検出遺構

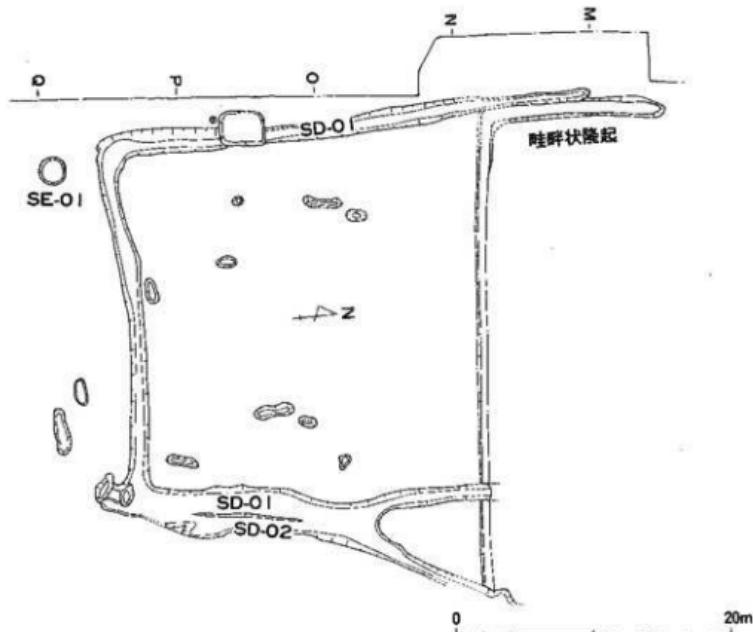
当調査地は、調査面積の約2割が搅乱によって失われていたにもかかわらず、弥生時代中期、古墳時代前期～後期、奈良時代、中世、近世の各遺構を確認できた。ただし、平面的に各生活面を捉えることは、困難であったので、当初検出された近世の生活面を第1調査面とした以外は、複数の生活面のものを第2調査面（最終面）で同一に検出し、埋土・遺物での検討で、その年代決定を行った。

#### 第1調査面

第1工区北西部から第2工区南西部にかけて検出したもので、SX-01埋土上層の黄灰色粘質土層上面を検出面とした。調査の結果、近世の溝2条、井戸1基、土括6基、柱穴6個、畦畔状隆起などが検出されている。水田あるいは畑が営まれていたようである。以下、主要なものについて概説する。

#### S D -01

第1工区北西部から第2工区南西部にかけて検出した。コの字形にめぐる溝である。削平のため判然としないが、畦畔状隆起に平行して北へ伸びていたものと思われる。規模は、SD-01と共有する部分の溝幅1.8m・他の部分で30～95cm・深さは5～15cmを測る。検



第13図 倍賀遺跡（HK・91-1）第1構造平面図

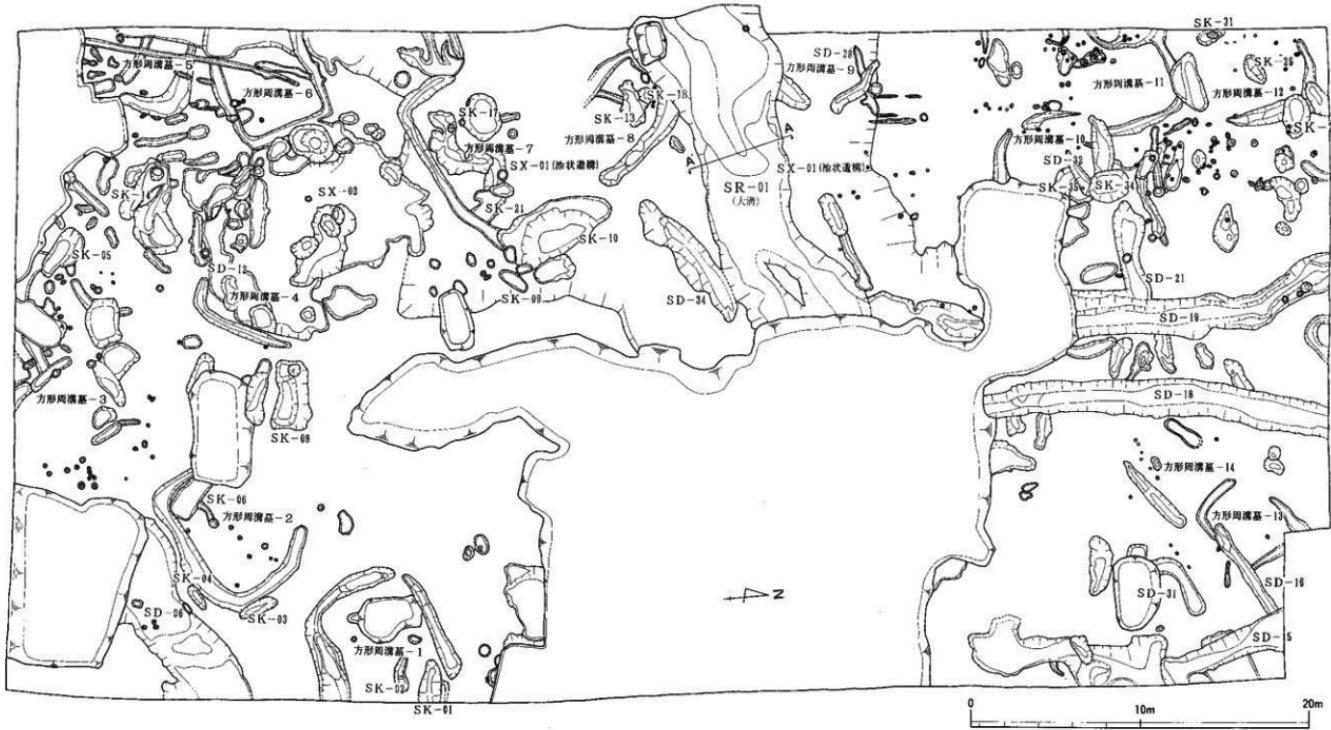
出長は、西側17.5m以上・南側13.5m・東側12m以上を測る。埋土は、淡灰色の砂混じり粘土1層である。遺物は、中近世の陶磁器・須恵器・土師器等が出土しているが、いずれも摩滅した細片である。

#### SD-02

SD-01の東辺と共有しながら北へ伸び、途中で北北東に屈曲する。第2工区では、搅乱により不明である。規模は、溝幅50~100cm・検出長8.5m以上を測る。埋土は、2層にわかれ、上層に淡灰色砂混粘土が堆積するが、下層は砂を中心とした堆積層である。遺物は、下層より近世日常雑器である、染め付け磁器の破片が出土したほか、上・下層とも中近世の陶磁器・須恵器・土師器等の細片が出土している。層位的にはSD-02のほうが古い。

#### SE-01

SD-01の南西屈曲部に近接する素堀り井戸である。堀形は上面円形を呈し、規模は、直径90cm・深さ1.9mを測る。底面は、平坦で、断面方形を呈する。内部には、灰色の砂質土が堆積し、遺物は、出土しなかった。SD-01とほぼ同時期のものと思われる。



第14図 倍賀遺跡（HK・91-1）第2遺構平面図

### 畦畔状隆起

第2工区南西部で検出した。盛土によるものであるが、全容は、削平のために判然としない。上面形はL字形を呈し、東西17m以上、南北6.5m以上を測る。断面形は、台形を呈し、幅30~45cm・高さ10cm前後を測る。SD-01と同時期のものと思われる。

### 第2調査面（最終面）

第6層上面及び第7層上面を検出面としたものである。多くの造構が第6層上面を構築面としており、第6層が欠如したり、第7層の粗砂や砾が顕著な場所では、造構があまり検出されていない。これは構築に不向きな土質を避けて造構が作られた為か、削平により失われてしまった為であろう。

検出した造構は、方形周溝墓14基・自然流路1条・大溝3条・溝35条・土壙約110基・柱穴約200個などである。すべて第6層上面及び第7層上面で検出した。以下、方形周溝墓群を中心に、主要な造構のみを概説する。

### 方形周溝墓群

14基が検出されている。中近世の削平や既設建物による搅乱のため、全体に遺存状態は、よくない。他に周溝墓の一部とおぼしき溝も検出されており、実際にはより多くの周溝墓が存在したものと思われる。周溝墓の群在状態は、第2工区の周溝墓6・7・8が溝を接して並ぶほかは、あまり規則性は感じられない。また、周溝墓-1・2・7など、墳丘規模が一辺7m以上を測る比較的大型のものは、第1工区でのみ検出されている。

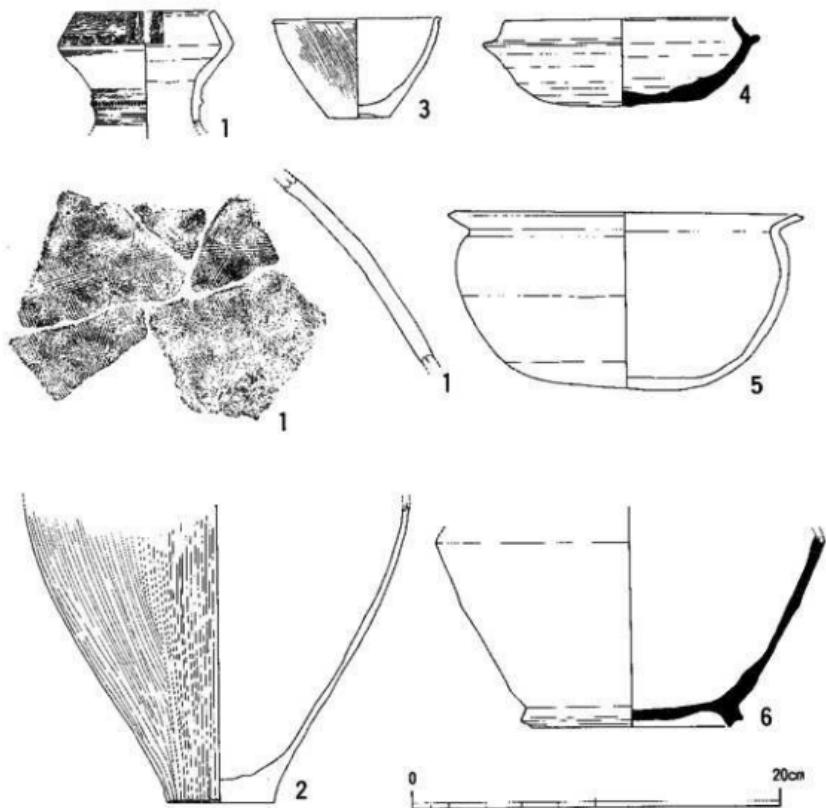
墳丘の平面形は、方形もしくは隅丸方形を呈しており、1辺4.5~9mを測る。方向は、方形周溝墓-3・6などを除き、南北軸を意識して構築されているようである。墳丘部の盛土は、削平により遺存しておらず、一部で主体部の痕跡らしきものが検出されたのみである。

周溝は、検出面でみる限り、4方の周溝がそろわないものが多い。削平の影響もあるが、完周せずに大きく陸橋部がひらくタイプが多いと思われる。周溝の断面形は、逆台形やU字形などを呈し、溝幅0.4~3m・深さ0.1~0.7mを測る。周溝内の埋土は、基本的に5~6層から多いもので10層に分層されるが、滯水の痕跡は、認められなかった。

遺物は、畿内第Ⅲ様式を中心とする弥生時代中期の土器が周溝内から出土しているが、方形周溝墓-9・10・11で完成品が出土した以外は、いずれも磨滅をうけた破片・細片であり、年代決定は困難であった。

### 方形周溝墓-1

第1工区東部で検出した。東周溝は、調査区外に至るために検出できなかった。陸橋部は、北東隅と北西隅に有するが、東周溝が存在せず、完周しないタイプかも知れない。墳丘の規模は、北辺で6.8mを測る。墳丘上には、2基の土壙などが存在する。SK-01は検出長2.5m・幅1.3m・深さ50cm、SK-02は、長さ2.1m・幅70cm・深さ25cmを測る。遺物は出土しておらず、形状などからも主体部かどうか不明である。周溝の断面形は、南周



第15図 倍賀遺跡（HK・91-1）方形周溝墓-9 及びSK-02出土土器

溝でV字形、他は逆台形を呈し、幅0.6～1.7m・深さ20～70cmを測る。周溝内には、褐色系の砂質土・粘質土などが堆積し、北周溝から弥生中期頃と思われる土器細片がわずかに出土している。

#### 方形周溝墓-2

方形周溝墓-1の南西部で検出した。3方で周溝が検出されたが、北側周溝は、検出されていない。削平による消失の可能性もあるが、完周しないタイプであろう。墳丘の規模は、南辺で8mを測る。墳丘上のSK-06は、検出長2.8m・幅1.4m・深さ20cmを測る。遺物は、弥生中期頃の土器底部などが出土しているが、主体部とは認めがたい。また、東

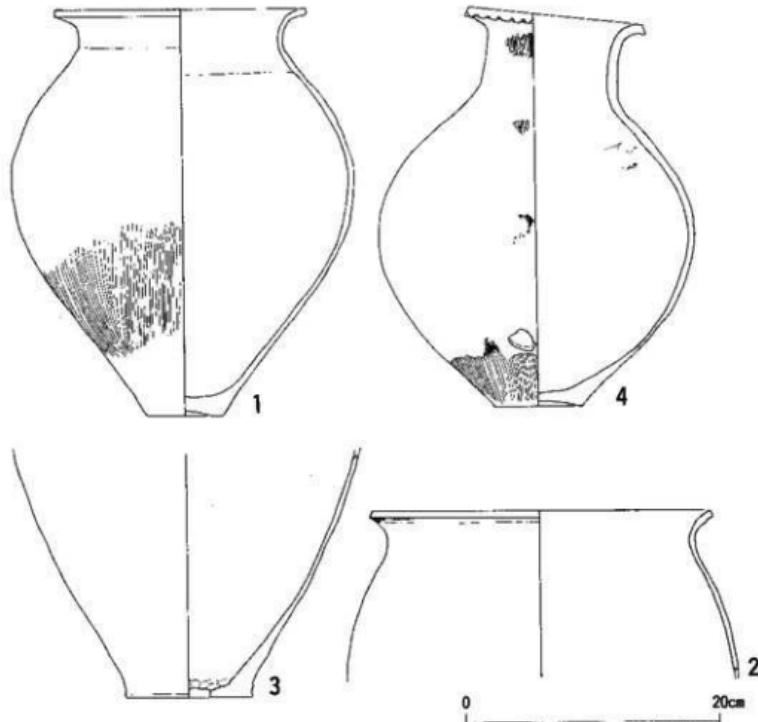
周溝と南周溝に接して、それぞれSK-03・SK-04が検出されている。SK-03は、長さ2.3m・幅0.8m・深さ18cm、SK-04は長さ1.6m・幅0.6m・深さ15cmを測り、土壙墓と考えられる。周溝の断面形はU字形を呈し、幅0.5~1.4m・深さ5~20cmを測る。周溝内には、灰褐色系の粘質土などが堆積し、遺物は出土しなかった。

#### 方形周溝墓-3

第1工区南部で検出した。3方で周溝を検出したが、南周溝は存在しない。陸橋部は北東隅と北西隅にも有している。墳丘の規模は、北辺で4.3mを測る。墳丘上のSK-19は中世の土壤である。周溝の断面形は、U字形を呈し、幅0.5~1m・深さ20~30cmを測る。遺物は、周溝内より弥生土器の細片がわずかに出土している。

#### 方形周溝墓-4

第1工区中央部で検出した。南周溝と東周溝を検出したが、大半をSD-12・SK-02と共有するため、全容は不明である。東周溝の検出長は、6mを測る。周溝の断面は、U



第16図 倍賀遺跡（HK・91-1）方形周溝墓-10及び方形周溝墓-11出土土器

字形を呈し、幅35～80cm・深さ6～15cmを測る。遺物は、周溝内より弥生土器の細片がわずかに出土している。

#### 方形周溝墓-5

第1工区南西部で検出した。周溝の北東部を検出したが、大半が調査区外、もしくは搅乱により、全容は不明である。周溝の断面は、逆台形を呈し、幅0.5～1.4m・深さ20～40cmを測る。周溝内には、暗褐色系の砂質土・粘質土などが堆積し、北周溝から畿内第Ⅲ様式の甕底部などの土器片が出土している。

#### 方形周溝墓-6

方形周溝墓-5の北側で検出した。3方で周溝を検出したが、西周溝の存在は、不明である。墳丘上の2条の溝は、中世のものである。墳丘の規模は、東辺で5mを測る。周溝の断面形は逆台形を呈し、幅40～90cm・深さ15～25cmを測る。周溝内には、褐色系の砂質土・粘質土などが堆積し、畿内第Ⅲ様式の土器片が出土している。

#### 方形周溝墓-7

第1工区北西部で検出した。南周溝と西周溝が検出されているが、東周溝は、SK-10に切られているので不明である。北周溝は存在しない。南周溝の検出長は、10.5mを測り、検出された13基中、最大のものである。墳丘内には、SK-21など、浅く不定形な土壤が存在するが、主体部の痕跡かどうか不明である。ただし、東側のSK-20は、土壤墓の可能性が高い。周溝の断面形は、U字形を呈し、幅60～90cm・深さ10～30cmを測る。周溝内には、褐色系の砂質土・粘質土などが堆積し、畿内第Ⅲ様式の土器底部などが少量出土している。

#### 方形周溝墓-8

第1工区北西隅で検出した。西周溝と東周溝が検出されており、北周溝は大溝(SR-01)に切られている。南周溝は、存在しない。東周溝の検出長は、6.5mを測る。墳丘上のSK-13・18は、古墳時代後期以降の土壤である。周溝の断面形は、U字形を呈し、幅50～90cm・深さ5～26cmを測る。遺物は、壺・甕・高坏・器台などが、東周溝の溝底に接して、破片もしくは細片の状態で多く出土している。畿内第Ⅲ様式古段階の一括遺物である。土器の一部は、大溝(SR-01)に流れ出している。(中東)

#### 方形周溝墓-9

第2工区南西部で検出した。東周溝と、大溝(SR-01)と共有する南周溝の一部が検出されているが、西部は調査区外に至り、全容は、不明である。東周溝の検出長は、4mを測る。周溝の断面形は逆台形を呈し、幅0.5～1.4m・深さ25～40cmを測る。周溝内には、灰色系の粘質土などが堆積している。遺物(第15図1～3)は、壺(1)・甕(2)・小鉢(3)などが、南周溝から浮いた状態で出土しているが、大溝(SR-01)が大半を切っているため、供獻土器は、少なく残りも悪かった。(1)は受口状口縁に細い頸部、そして算盤玉の様な体部を取り付く、伊勢湾周辺から搬入された壺形土器である。口縁外面には、棒状浮文に刻

み目、そして櫛描波状文を2条上下に施す。頸部には、突帯に刻み目、そして櫛描波状文を突帯の上下に施す。体部には、櫛描斜格子文及び櫛描直線文を施す。焼成は、良好で、色調は淡黄色を呈する。(2)は壺の胴部下半から、底部に欠けての破片である。外面は上から下へのヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。焼成は、良好で、胎土に1~2mm程度の白色砂粒を含む。色調は、淡黄色を呈する。また、胴部外面下半から底部にかけて、炭化物及び煤が付着する。(3)は小型の鉢である。口縁部を少し外側へ折り曲げ、底部は、すこしへこむ。外面は、斜め方向のハケ、ナデ調整を施す。焼成は、良好で色調は、淡黄色を呈する。

#### 方形周溝墓-10

第2工区西部で検出した。3方で周溝が検出されたが、東周溝の存在は、攪乱等により不明である。陸橋部は、北西隅と南西隅に有する。墳丘上には、SK-35・SD-32などがあるが、いずれも主体部痕跡とは認めがたい。墳丘の規模は、南北で5mを測る。周溝の断面形は、南辺で逆台形を呈する以外は、U字形を呈し、幅0.2~1.2m・深さ9~54cmを測る。周溝内には、褐色系の砂質土・粘質土などが堆積している。遺物(第16図1~3)は、周溝内から壺(2・3・4)が出土している。(2)は、南周溝で検出された壺形土器である。体部が大きく張り出す球形を呈し、体部最大径が口縁部径を凌駕している。口縁部は、ゆるやかる外反し、口縁部に面を持つ。胴部下半から底部付近の外面には、ヘラミガキを施す。内面は、ナデ調整を施す。また、胴部下半部と口縁端部に煤が付着している。焼成は良好で色調は淡灰色を呈する。(3)と(4)は北側の周溝で検出された壺形土器である。(3)は口縁部付近の破片で、(4)は底部付近の破片である。同一個体であるが、胴部中央の部分の破片が細片化しており、欠損部も多いため、図上復元もあえてしなかった。口縁部は、緩やかに外反し、口縁端部に面を持つ。まり、底部は、緩やかに広がる体部を呈し、底面中央には焼成後穿孔する。焼成は、良好で、色調は、赤褐色を呈する。

#### 方形周溝墓-11

方形周溝墓-10の北西部で検出した。3方で周溝が検出されているが、南周溝は、存在しない。西周溝は西側に屈曲し、調査区外に至るので、プランでは判別できなかったが、別遺構と共有していたのかも知れない。墳丘の規模は、北辺で4mを測る。周溝の断面形はU字形を呈し、西周溝を除く溝幅40~80cm・深さ12~25cmを測る。遺物(第16図4)は、周溝の北西隅で出土した完形の壺形土器(4)である。中位で張る長胴の体部から、緩やかに延びる頸部、そして口縁端部が短く屈曲して開く。口縁端部に粘土帶を付加して、指により鋸歯状に下方につまみだしている。内外面ともにハケが残り、底部付近にはヘラミガキを施す。また、底部からやや上方に焼成後穿孔する。焼成は、良好で色調は淡茶色を呈する。

(中東・濱野)

#### 方形周溝墓-12

第2工区北西隅で検出した。3方で周溝が検出された。陸橋部は、北東隅を除く各隅に

有している。SK-31は、西周溝の一部にあたるものかどうかは不明である。墳丘上のSK-29は、長さ1.9m・幅1m・深さ52cmを測る。遺物は、周溝と同時期のものが出土しているが、主体部にあたるかどうかは不明である。墳丘の規模は、南北で6mを測る。周溝の断面形は、U字形を呈し、幅は南周溝が1.7m、他は0.4~1.2m・深さ15~30cmを測る。周溝内には、褐色系の砂質土・粘質土などが堆積し、弥生中期の土器片が出土している。

#### 方形周溝墓-13

第2工区北東部で検出した。周溝は完周するが、北西部にやや広い陸橋部を有する。墳丘の規模は、東西4.3m・南北約3.6mを測る。周溝の断面形は、U字形を呈し、幅0.4~1m・深さ2~15cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### 方形周溝墓-14

方形周溝墓-13の南西で検出した。南周溝と、削平されかかった北周溝が検出されたのみである。墳丘の規模は、南北で3.2mを測る。南周溝の断面形は、U字形を呈し、検出長5.1m・幅30~90cm・深さ13~35cmを測る。遺物は、弥生中期頃の土器片がわずかに出土している。  
(中東)

#### SX-01(池状遺構)

第1工区北西部から第2工区南西部にかけて検出した。方形周溝墓7~9・大溝(SR-01)などと共有する広い落ち込みである。南北長は30m・平均的な地山面と最深部の比高差は約70cmを測る。なだらかに落ち込んでおり、池状遺構と思われる。埋土は、茶褐色系の粘質土など3層が堆積し、埋土上層から滑石製紡錘車(図版2-1下)が出土したほか、各層より、円筒埴輪・須恵器・土師器・瓦器そして加工木など、古墳時代~中世にかけての土器片等が出土している。このSX-01(池状遺構)上面に、近世の水田もしくは畠が形成されており、近世以前に埋没して機能を停止したものと思われる。

#### SX-02

第1工区西側で検出した落ち込みである。不整形なプランを呈するが、複数の土壤が集中して切りあっているようである。ただし埋土は、茶褐色の粘質土が全体に堆積しており、平面での個々の検出は不可能であった。完掘した結果、すべての掘方は、地山層の黄色の砂疊層上面でとまっており、粘土探査の可能性が高い。この複数の土壤の痕跡から、逆さまに伏せた状態の、完形の土師器壺(第15図-5)が出土している。出土した土師器の壺は、人面墨書き器用に特別に作られることが多いタイプで、粘土探査に伴う祭祀の可能性が高い。そして、同じ埋土から、台付長頸壺の底部(第15図-6)が出土している。また時期は遅るが、複数の土壤の一つから、須恵器の壺身(第15図-4)が単独で出土している。

#### SD-06

第1工区南東部で検出した。北東から南西に伸びる溝で、南側は、擾乱により不明である。検出長12m・幅3.2~4.8m・深さ25~50cmを測る。溝底は、中央部が落ち込んでいる

### SD-15

第2工区北東部で検出した。南北に伸びる溝で、SD-32と接するあたりで途切れている。断面形はU字形を呈し、検出長7.5m・幅1.3~2.2m・深さ20~30cmを測る。遺物は、SR-01と同時期の、庄内式（新相期）の土器片が出土している。

### SD-16

第2工区北東部で検出した。北東から南西に伸びる溝で、SD-15に切られ、方形周溝墓-13の南周溝を切る関係にある。断面形は、逆台形を呈し、検出長6.2m・幅55~80cm・深さ35cm前後を測る。遺物は、弥生中期～庄内併行期の土器片が出土している。

### SD-18・19（土器廃棄溝）

第2工区中央部で検出した南北溝である。両溝とも平均幅2m・深さ40cmを測る。調査区中央部の既設建物の攪乱によって、南側は破壊されており、北側は調査区外に延びている。検出長は、SD-18で20m、SD-19で20mを測る。溝の埋土は、大きく3層に分かれるが、そのうち中央部分は、ほとんど畿内II様式の土器で占められる。どの層にも黒色の粘質土が堆積しており、部分的に植物遺体が認められるが、水の流れていた痕跡はまったくない。出土遺物の量は、整理用コンテナにして約30箱以上出土しており、畿内第II様式の土器がほとんどである。出土した遺物については、出土遺物の項で若干取り上げている。

（中東・濱野）

### SD-21

第2工区中央部で検出した。東西に伸びる溝で、東端は、SD-19に接する。断面形は、逆台形を呈し、検出長6m・幅1.1~1.8m・深さ25~55cmを測る。壙内には、暗褐色系の砂質土・粘質土などが堆積し、弥生中期墳の土器片が出土している。

### SD-34

大溝（SR-01）の南側で検出した。北東から南西に伸びる溝で、方形周溝墓の可能性もあるが、大溝（SR-01）やSX-01のために、不明である。断面形は、V字形を呈し、検出長8.8m・幅1.1~1.9m・深さ40~50cmを測る。遺物は、弥生中期墳の土器片が出土している。

### SK-05

第1工区南部で検出した隅丸長方形の土壙で、上層を浅い円形土壙が切っている。長軸3.2m・短軸約1m・深さ25cmを測る。壙内には、灰褐色系の粘質土が堆積し、SD-18・19と同時期の、畿内第II様式の広口壺などが出土している。

（中東）

### SK-08

第2工区中央部で検出した不整形なプランの土壙で、断面形は、逆台形を呈する。埋土は、黒褐色系の砂質土である。出土遺物は、円筒埴輪基底部片（第17図-1）だけしか出土しなかった。出土した円筒埴輪は全体的に摩滅しているが、外面には、第1次調整の斜めハケが認められる。内面は指押さえ及びナデ調整が認められる。また、突帯（タガ）の

形状は、不整形である。川西宏幸  
氏編年のV期にあたると思われる。

#### SK-10

第1工区北西部で検出した歪んだ橢円形の大型土壙で、方形周溝墓-7の東周溝を切っている。長軸6.8m・短軸3.2m・深さ48cmを測る。境内には、暗灰褐色系の砂質土・粘質土などが堆積し、弥生中期頃の土器片が出土している。

#### SK-13

調査区中央部で検出した不整形なプランの土壤で、断面は、浅い皿状を呈する。中世に形成されたSX-01(池状遺構)のため、真正の肩は、削平された公算が高い。

埋土は、黄灰色系の粘質土である。境内には、12~20cm前後の人頭大の自然石とともに、盾形埴輪および土師器の底部(第17図-2・3)が出土している。出土した盾形埴輪は、円筒部からのびる盾の下半部の断片と思われ、表面に2本の線によって上下に分割し、鋸歯文がへら描きされている。しかし、全体に摩滅が著しく、調整や文様など判然としない。焼成は、良好である。SK-08・13およびSX-01(池状遺構)の埋土内から出土した埴輪は、高槻市の新池窯産という教示を受けた。土師器の底部は全体的にいびつで、内面に指押さえによる調整痕が認められるが、全体的に摩滅が著しい。

#### SK-14

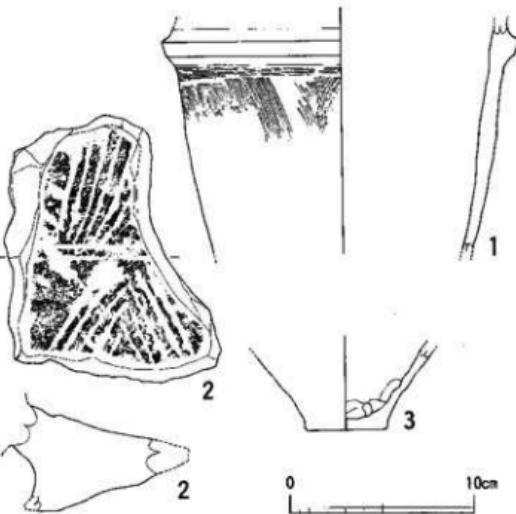
第1工区の南西部で検出した不整形の土壤である。いくつかの土壤に切られているため、全容は不明であるが、長軸4.1m・短軸約1m・深さ35cmを測る。遺物は、畿内第Ⅲ様式の土器底部などが出土している。

#### SK-17

第1工区北西部で検出した歪んだ円形の土壤である。長軸2.8m・短軸2.2m・深さ48cmを測り、平坦な壙底を呈する。遺物は、出土しなかった。

#### SK-28

第2工区北西隅で検出した橢円形掠り鉢状の土壤である。方形周溝墓-12の東周溝を切っている。長軸2.6m・短軸1.5m・深さ25cmを測る。境内には、褐色系の砂質土などが堆積し、弥生中期頃の土器片が出土している。



第17図 信賀遺跡(HK-91-1) SK-08及び  
SK-13出土遺物

## SK-34

第2工区西部で検出した円形の土壌である。方形周溝墓-10の北周溝を切っている。長軸2.4m・短軸1.9m・深さ50cmを測り、平坦な底を呈する。境内には、褐色系の砂質土・粘質土などが堆積し、弥生中期頃の土器片が出土している。  
(中東)

### 大溝(SR-01)

西から東に流れる大溝で、第1工区の北西隅から第2工区南端にかけて検出した。東に向かうにしたがって北に振れをしめしているが、ほぼ直線的である。調査区の中央より東側部分は、調査以前の既設建物の影響で、すべて破壊されており不明になっている。

検出した溝の幅は、平均5~8mを測り、深さは約70cm~1mを測る。溝の形状は肩口から垂直に落ち、溝の底は、浅い碗状あるいは水平である。ただし、溝の東端付近は、地山層の明黄色疊層が露出してマウンド状になっている。溝の堆積は、大きく5層にわけることができる。

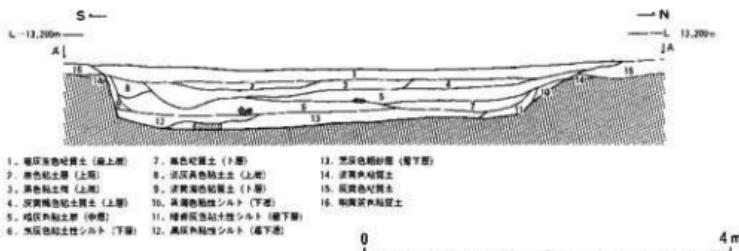
最上層は、古墳時代の須恵器片が混じる暗灰茶色粘質土層であるが、中世に形成されたSX-02の影響で最終層ではない。上層は灰黄色および黒色の粘土層で、部分的に炭化物が混じる。中層は、黒灰色の粘土層で多くの古墳時代前期の遺物が集中して出土している。

下層は、黒色の粘質土ないしシルトを中心とした層で、多量の植物遺体を含んでいる。最下層は、溝の中央より西側部分のみ堆積している黒灰色の粗砂層で、弥生時代中期から弥生時代後期後半までの土器が出土している。

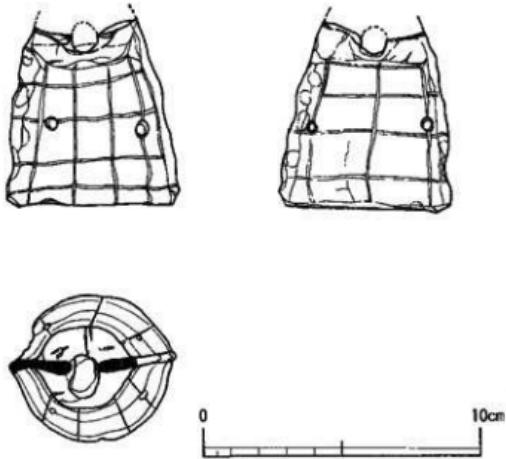
ただし、溝の東端付近は、前述したように地山層の明黄色疊層がマウンド状に隆起している理由で、溝の堆積は下層まで、地山直上で古墳時代前期の遺物が出土している。

この大溝の堆積状況及び方形周溝墓の供献土器が流れ出している状況、そして最下層のみ古墳時代前期の遺物が混じらないことを考えると、本來西から東へ流れる自然流路を古墳時代前期頃に改修した可能性が高い。この改修の結果、自然流路本来の堆積層である最下層のみが残り、溝の肩口を人工的に垂直に削り、溝の底が平坦になったと思われる。

溝内からは、コンテナにして50箱以上の土器や木製品が出土しているが、土器及び木製品については、出土遺物の項で取り上げここでは、最下層から出土した銅鐸形土製品と石



第18図 倍賀遺跡(HK-91-1) 大溝(SR-01) 中央セクション図



第19図 倍賀遺跡（HK・91-1）銅鐸形土製品実測図

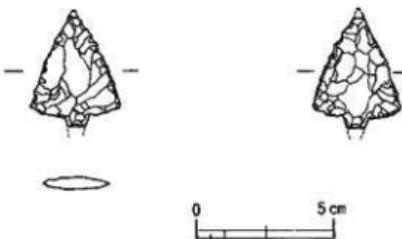
鐵について述べる。

#### 銅鐸形土製品（第19図）

鉢の部分は、欠損するが、それ以外は完全な状態である。現存長6.6m、最大幅6.2cm、重さ101gを測る。両側端を少しまんべに鋒にみせている。表裏両面に線刻により各25.16区画の袈裟襷文を施す。外面は、ナデ調整、内面は、指押えとナデ調整である。現在、茨木市内の遺跡からは、東奈良遺跡において銅鐸形土製品が3例出土しているが、東奈良遺跡以外の遺跡からの出土は、初例である。

#### 石鐵（第20図）

大型の凸基有茎式石鐵である。先端部及び基部の一部を欠損する。片面中央には、大剥離面を残し、両側片は細かい剥離によって調整している。全長3.9cm、最大幅3.1cm、厚さ0.45cm、重さ5gを測る。



第20図 倍賀遺跡（HK・91-1）石鐵実測図

## 出土遺物

今回の調査で出土した土器は、整理用コンテナ100箱以上を越え、特に大溝（SR-01）及びSD-18・18（土器溜り溝）からの出土がもっとも多い。上記の理由から、整理作業に時間的制約を受け、図化することが出来た資料は限られたため、大溝（SR-01）の埋土中層から多数出土した古墳時代前期初頭の遺物を中心に取りあげることとし、その他の遺構から出土した遺物は、遺構説明の中で適時、特徴的な遺物のみ取り上げることにした。

特に、大溝（SR-01）の埋土中層を中心にして出土している、古墳時代前期初頭の遺物の中でも、まとまって多量に出土した小型丸底壺は時期的及び手法・形態的に細分可能であるが、今回は、出土した小型丸底壺の半分程度した図化しておらず、一括に報告することとなった。

また、大溝（SR-01）の埋土最下層及びSD-18・19（土器廃棄溝）から多量に出土している、弥生時代の遺物については、若干しか取り上げることができなかった。

### 大溝（SR-01）埋土中層及び最下層出土の土器・木製品

（第21図～第24図－1～33）

（1）～（21）は、小型丸底壺である。

調整手法・形態から、数種類に分けることができる。形態的には中型の（1）～（18）、大型の（21）及び小型の（19）～（20）などの3種類に大きく分類できる。また、調整手法のちがいから、外面および内面を削るタイプや、強いナデ調整を施すタイプなどに分けられる。

（22）～（24）は、壺形土器である。

（22）は、やや直立ぎみの頸部から外方へ口縁部がひらき、口縁端部に面を持つ。頸部から体部外面にかけて、粗いヘラミガキを施す。

（23）は、直立した頸部から外方へゆるやかに口縁部がひらく。体部は、球形化を呈し底部は突出する。体部下半に叩きを施す。そして頸部に逆U字状の浮文を貼りつける。

（24）は、口頸部が欠損しているが、扁球形の体部をもつ細頸壺である。外面は、丁寧なヘラミガキを施す。

（25）～（29）は、壺形土器である。

（25）～（26）は、布留式壺である。（25）は、口縁部がやや内弯し、端部は、内側に丸く肥厚させている。外面は、細かいハケを施し、内面は、ヘラケズリを施す。

（26）は、口縁部はわずかに屈曲しながらもほぼ直線的にのび、端部は、やや外方に張だした平坦面をもっている。外面は、細かいハケを施し、内面は、ヘラケズリを施す。

（27）は、庄内甕の影響を受けた在地の伝統的第V様式の甕である。口縁部は、屈曲しながら外方に直線的にのび、口縁端部は、つまみあげる。外面は、粗いタタキ、内面は、ナデ調整を施す。

(28)は、口縁部が屈曲しながらも、ほぼ直線的にのび、口縁端部に面を持つ。体部の形状は、やや長めの球形。底部は、形骸化した平底を呈する。外面は、摩滅のため不明、内面は、ハケおよびヘラケズリを施す。

(29)は、口縁部が「く」の字に屈曲しながらもほぼ直線的にのび、口縁端部に面を持つ。体部の形状は、球形を呈する大型品である。外面全体に煤が付着する。内面は、ヘラケズリを施す。

(30)～(31)は、最下層から出土した壺形土器である。

(30)は、口縁部は外弯しながら外方にのび、口縁端部は、面を持ち上下に肥厚する。口縁端面に凝凹線と円形浮文にて加飾する。頸部外面は、ナデまたはハケ、口縁部内面はヘラミガキを施す。畿内第V様式前半

(31)は、口頸部が上方にのびたのち外方にのび、口縁端部は、面を持つ大型の広口壺である。口縁部直下の頸部外面は、粗いハケ、その下は、ヘラミガキを施す。口頸部内面は、粗いハケ、その下は、ナデ調整を施す。

(32)は、最下層から出土し高环形土器である。

柱状部は、長く裾までなだらかに広がり、脚端部は、上下に拡張している。柱状部外面は、上から下への丁寧なヘラミガキ、裾端部は、横ナデ調整を施す。

(33)は、木製盤である。

全長41cm、幅28cm、深さ5cmを測る一木作りの木製盤である。底面四隅には、脚部を削りだしているが、全体的に傾いており安定性が悪い。完形品で出土しており、茨木市では、初例である。樹種鑑定はしていないため不明だが、針葉樹の可能性が高い。

#### SD-18・19（土器溜り溝）埋土内出土の土器

##### （第24図-34～37）

(34)は、大型の広口壺である。口頸部は、上外方にのびたのち、口縁端部は、下方に拡張して面をとる。外面は、胴部上半から頸部にかけて櫛描直線文及び櫛描波状文、そしてハケ調整を施す。また胴部下半は、ヘラミガキを施す。内面は、ナデ調整。また、底部には、木葉痕を残す。畿内第II様式・SD-19出土

(35)は、長胴の器体に短く外反する。頸部から水平方向に口縁部がつく、無文の壺である。全体的に摩滅が著しく、調整等は、不明だが部分的にハケ調整が残る。今回、SD-18・SD-19から出土した土器のなかで、一番新しい様相を持っている土器で、この種の装飾のとぼしいやや大きめの壺は、播磨から攝津において畿内第III様式の時期に散見される。

(36)は、中型の広口壺である。頸部から短く外反し、口縁部は面を持つ。外面は、ヘラミガキを施す。畿内第II様式・SD-18出土

(37)は、台形土器である。作業台と推定される、台の直径と脚部の直径があまり変わらない低脚の、台形土器である。全体に摩滅が著しく、調整等は不明だが、脚部付近にナデ

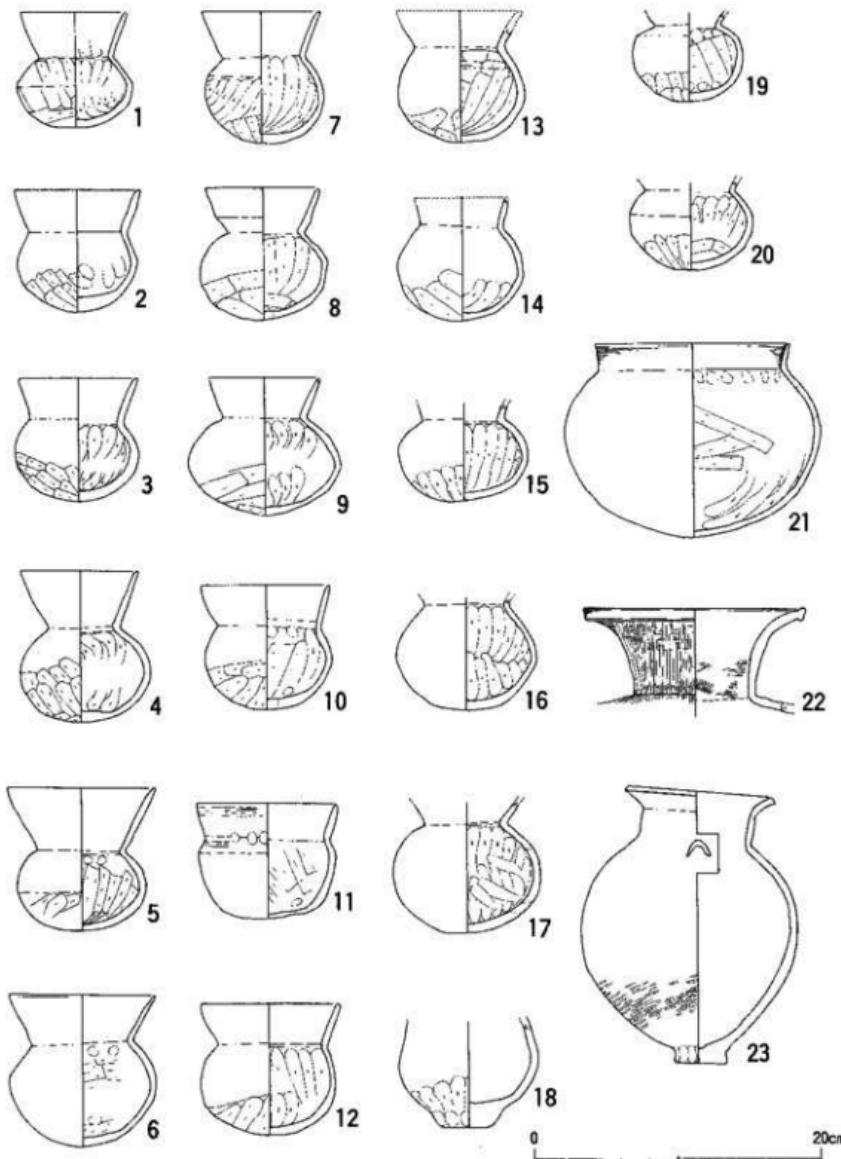
調整と思われる痕跡が認められる。今回、茨木市から出土した台形土器のなかで、もっとも時期の古い例となった。SD-19出土

(濱野)

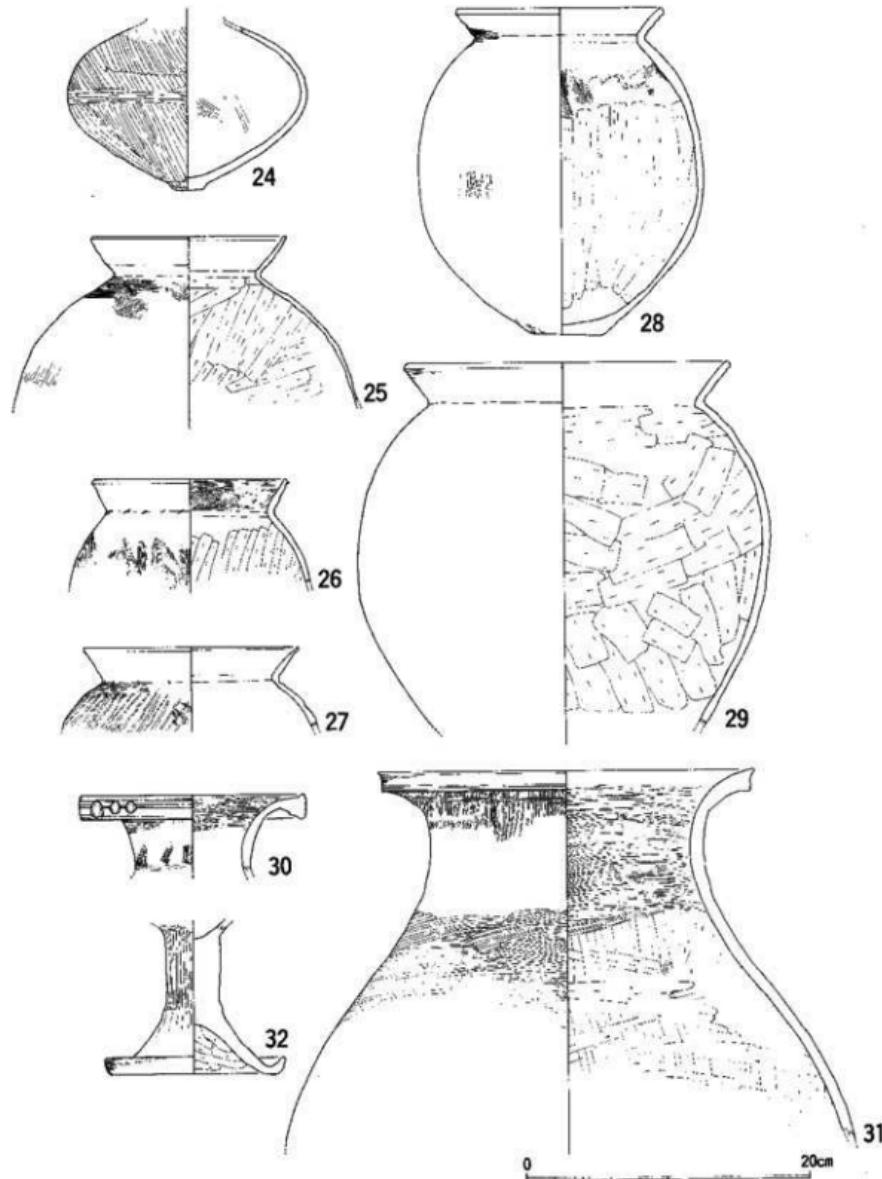
<註1>高槻市埋蔵文化センター 森田克行氏他御教示

<註2>寺沢薰・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年（近畿編II）』

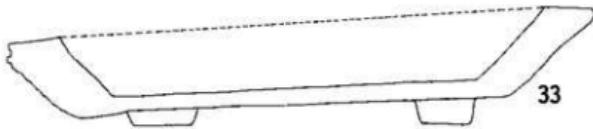
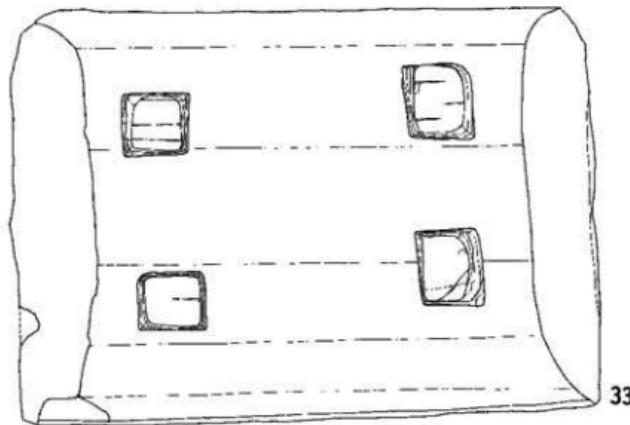
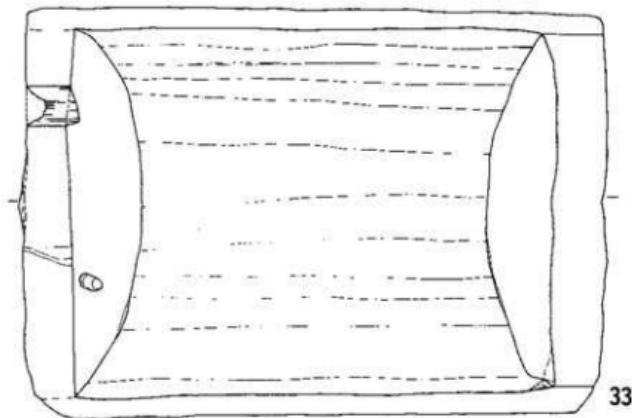
森岡秀人「山城地域」より



第21図 倍賀遺跡（HK-91-1）大溝（SR-01）埋土中層出土土器

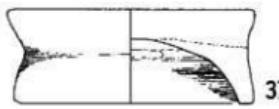
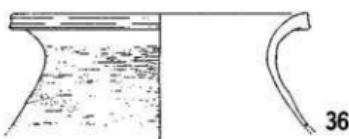
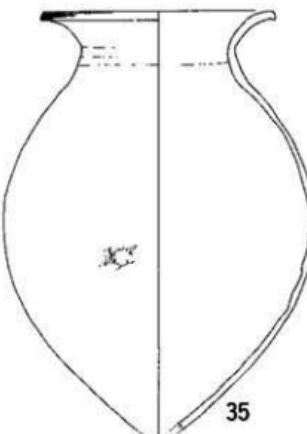
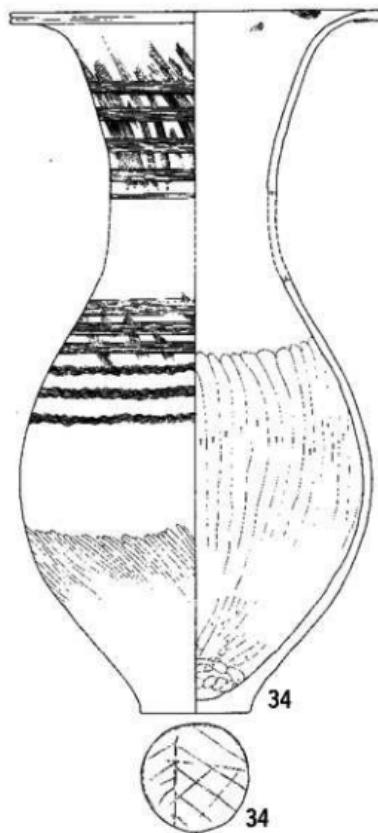


第22図 倍賀遺跡 (HK-91-1) 大溝 (SR-01) 埋土中層及び最下層出土土器



0 20cm

第23図 倍賀遺跡（HK・91-1）大溝（SR-01）埋土中層木製盤実測図



0 20cm

第24図 倍賀遺跡（HK・91-1）SD-18及びSD-19出土土器

### 第3節 まとめ

倍賀遺跡は、茨木市内の集落遺跡の中でも実体が不明だった遺跡の一つで、今回の発掘調査によって、若干の知見を得ることができた。今回の発掘調査で判明した二・三の成果と問題点を以下に箇条書きにして、まとめとしたい。

1、今回の調査地点で、もっとも古い弥生時代中期前半（畿内第Ⅱ様式）の遺物を出土した遺構は、SD-18・SD-19（土器廃棄溝）及び若干の土壌であるが、大半の遺構は、弥生時代中期頃（畿内第Ⅲ様式古段階）の方形周溝墓群が中心を成している。既往の調査からこの調査地点周辺には、方形周溝墓を主体とする、弥生時代の墓域が広がっていることが考えられていたが、今回の調査によって、あらためて追認することとなった。しかし、今回検出した方形周溝墓群が、弥生時代中期中頃までのものであり、以後の墓域は、どこへ移動したのかが、新たな問題点として同時に浮かびあがることとなった。

また、郡遺跡の畠田地区が、茨木市立中央図書館建設に伴う調査の結果、集落域と考えられていたが、確実に遺構面と遺物包含層が、今回の倍賀遺跡まで延び、続いていることが判明した。しかし、茨木市立中央図書館の調査の結果では、弥生時代前期後半からの遺物が出土しており、集落の中心になる時期が、大溝（環濠）を含め、弥生時代後期からであり、今後の調査に期待するところも多くなかった。

2、今回の調査のなかで、特に多くの遺物が出土した大溝（SR-01）をあげておきたい。この大溝は本來、千里丘陵の北東部の上穂積・郡山から東へ流れる自然河川のひとつと考えられる。このことは、現在も上穂積・郡山から何本も東へ流れる流路があり、調査地付近にも、おなじ方向に流れている水路があることを指摘しておきたい。

また、今回調査した大溝の最下層には、集落で使用していたと思われる銅鐸形土製品をはじめとする、多量の弥生時代中期前半から弥生時代後期後半にかけての土器が投棄した状態で出土している。

そして、大溝の中層から出土している遺物を検討した結果、古墳時代前期初頭頃（庄内式新相期）に、この自然河川を人工的に開削しており、このため、弥生時代中期中葉（畿内第Ⅲ様式古段階）の方形周溝墓の供獻土器が流出している状況が確認でき、この時期中・小河川の改修がおこなわれたことを示している。

市内の東奈良遺跡においても、この時期、大溝が開削されており、古墳時代前期初頭における集落構造を知る上で、重要な手掛かりを得ることとなった。

また、この大溝から出土した遺物のなかで、特に中層を中心に出土した古墳時代前期の遺物群に注目したい。この遺物群は、庄内式の新しい段階から布留式の古い段階までの時期差があるが、茨木市では、初例となった木製盤や小型丸底壺を中心とする土器群などの特色があり、大溝開削などに伴う、祭祀的様相がうかがうことができる。

出土した土器の中で、特徴的な様相としては、小型丸底壺の出土量が圧倒的に多く、小

型精製土器のうち、小型器台や小型鉢はほとんど出土しなかった。また、布留式甕や高坏なども出土しているが、量的に多くなく、搬入土器も、中河内からの庄内甕の破片以外目立つものもなく、少量であった。

しかし、整理時間の関係上、全体的な細かい検討をしていない。このため庄内式から布留式にかけては、土器の移動が活発な時期でもあり、今後整理途上で新たな搬入土器なども発見される可能性は高いと思われる。

近年、市内の東奈良遺跡以外においても、同時期の遺構・遺物が近隣の吹田市垂水南遺跡などで検出されており、今後、北摂地方の同時期の遺跡などの関係を考える上での参考資料になったと思われる。

また、銅鐸型土製品が茨木市においては、東奈良遺跡において現在3例出土しているが、今回、東奈良遺跡以外の遺跡においての出土であり、めずらしく鋏以外の部分は完全な状態で出土している。しかし残念なことに、大溝最下層からの出土のため、一緒に出土している上器の年代が弥生時代中期前半から弥生時代後期前半ぐらいまでの時間幅があることである。しかしながら、出土している層の遺物は、弥生時代中期の土器を中心をなしているため、当該期の所産と考えたい。

3、出土遺物のなかで、銅鐸型土製品以外にもうひとつ注目したいのは、方形周溝壺一9から出土した、伊勢湾地域から搬入されたと思われる壺である。全体を復元するほどの破片は残っていないが、特徴的な受け口状口縁を呈し、胴の張る体部、そして櫛描波状文や棒状浮文などで加飾しており、三重県北部から愛知県にかけての中期の土器の可能性が高い。現在のところ、東奈良遺跡でも当該期の伊勢湾地域から搬入されたと思われる土器は出土しておらず、近隣でも見つかっていない模様である。時期的には、一緒に出土した畿内の土器から弥生時代中期中頃と思われ、時期の下がる土器が、今回の調査時点では大溝(SR-01)の最下層ぐらいしか出土しておらず、尾張地方の貝田町式ぐらいに併行するものと考えるが、今後類例を搜し、所属時期の確定や搬入ルートなどの検討をしたい。<sup>⑨</sup>

4、今回、土壤やSX-01(池状遺構)から、まとまった数の埴輪片が出土した。出土した埴輪を観察すると、円筒埴輪ばかりではなくSK-13のように、盾形埴輪などの形象埴輪が出土していること、出土した埴輪のほとんどの時期が、川西宏幸氏の編年で第V期にあたることから調査区至近地に当該期の埋没墳が眠っているのは確実と思われる。

また、これまでの既往の調査でも、郡遺跡及び春日遺跡において埋没墳が数基検出されている事実から、倍賀遺跡にも埋没墳が存在し、高槻市新池窯から運ばれてきた埴輪を使用している古墳が、存在するものと思われる。そして郡遺跡周辺に埋没している古墳の存在の解明は、從来の茨木市における古墳の変遷の推移や様相に、変化をあたえるものと思われる。

以上のように、今回の発掘調査は、今まで遺跡の様相があまり判明していないかった倍

賀遺跡であるが、いくつかの成果を得ることができた。今後も、郡遺跡との関係ばかりでなく倍賀遺跡と同じように遺跡の様相がほとんど知られていない、春日遺跡なども含めて、郡遺跡を中心として、広がる遺跡群としてとらえていきたいと考えている。

(濱野)

<註1>三重県の北勢山麓地域に所存する地蔵僧遺跡から出土している在来系土器の中に今回の調査で出土した土器と良く似た土器があるが、所属時期がIV期までさがり時期がずれるため、今後の同地域の類例の増加を待ちたい。

参考文献、第7回東海埋蔵文化財研究会・1990年12月

伊勢湾岸の弥生時代中期をめぐる諸問題

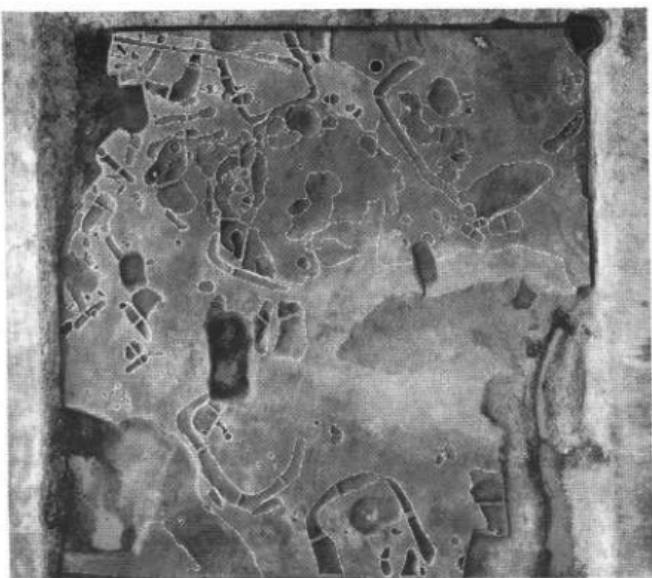
土器・墓・ムラによる画期と地域間交流

<註2>参考文献

川西宏幸 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号・1978年

# 図 版





(上) 第1工区遺構全景(航空写真)



(下) 第2工区遺構全景(航空写真)



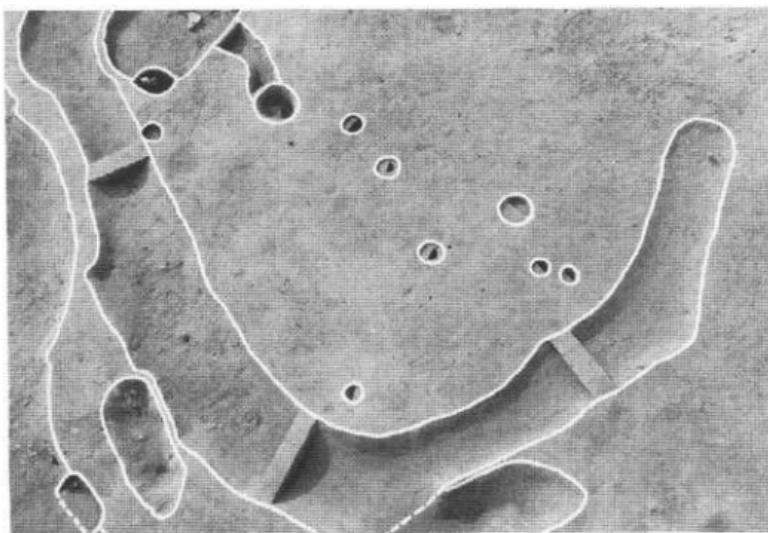
(上) 第1遺構面検出状況（北から）



(下) SX-01(池状遺構)出土石製紡垂車出土状況



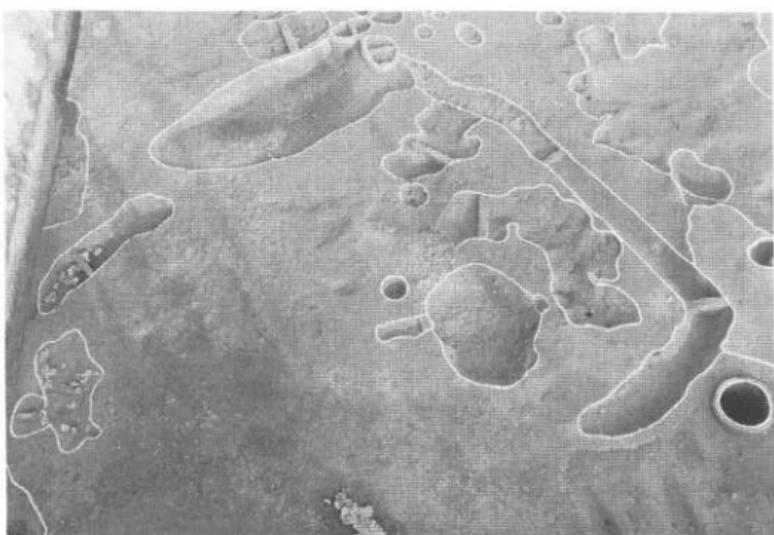
(上) 方形周溝墓－1 検出状況（東から）



(下) 方形周溝墓－2 検出状況（東から）



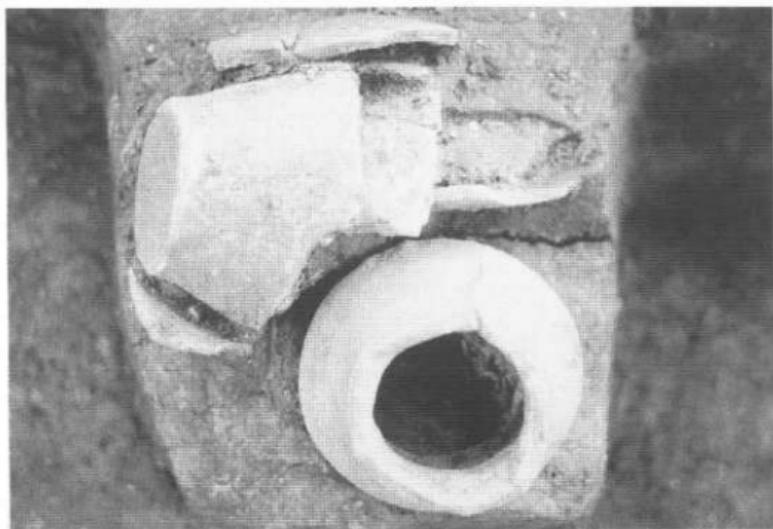
（上）方形周溝墓－3 検出状況（東から）



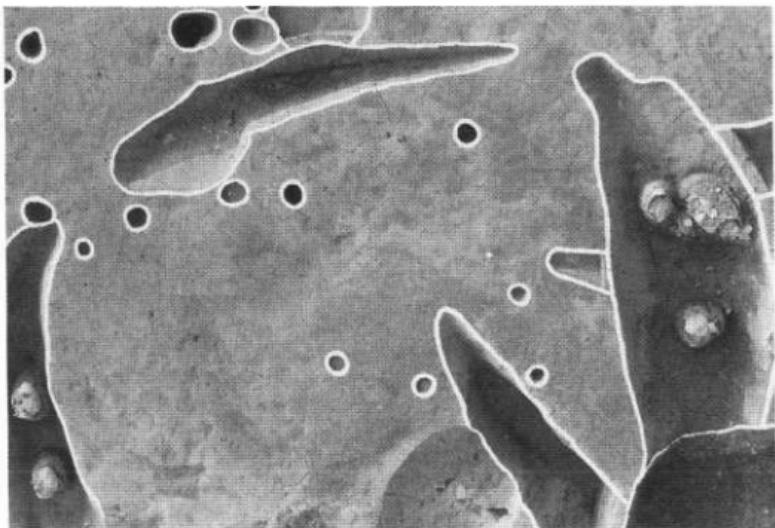
（下）方形周溝墓－4 検出状況（西から）



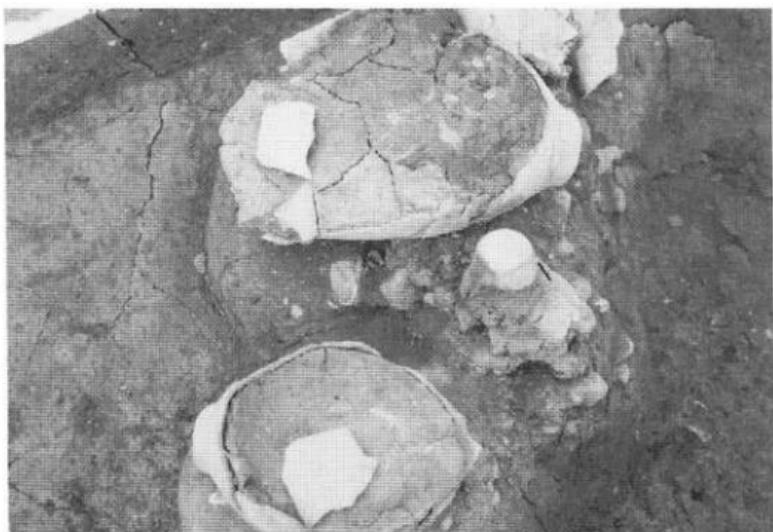
(上) 方形周溝墓-9 土器出土状況 (北から)



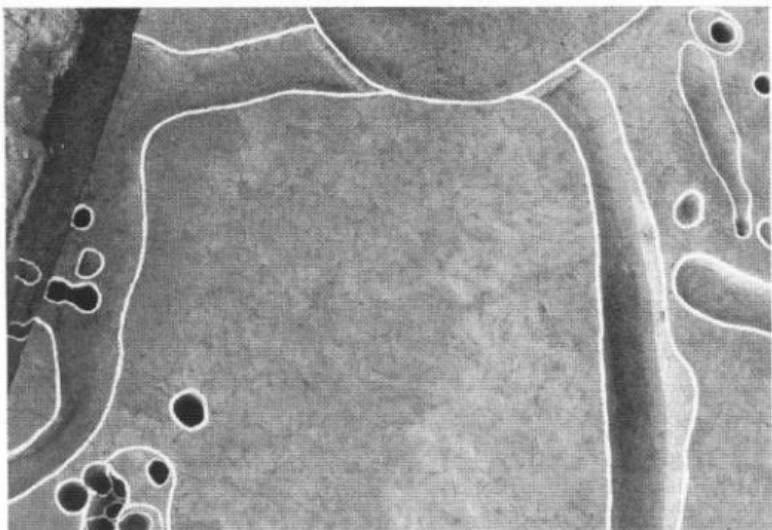
(下) 方形周溝墓-9 土器出土状況 (北から)



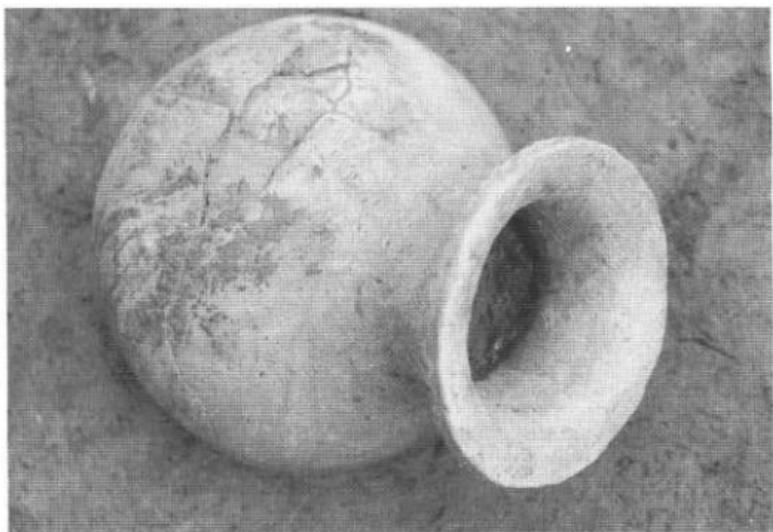
(上) 方形周溝墓-10検出状況（東から）



(下) 方形周溝墓-10土器出土状況（北から）



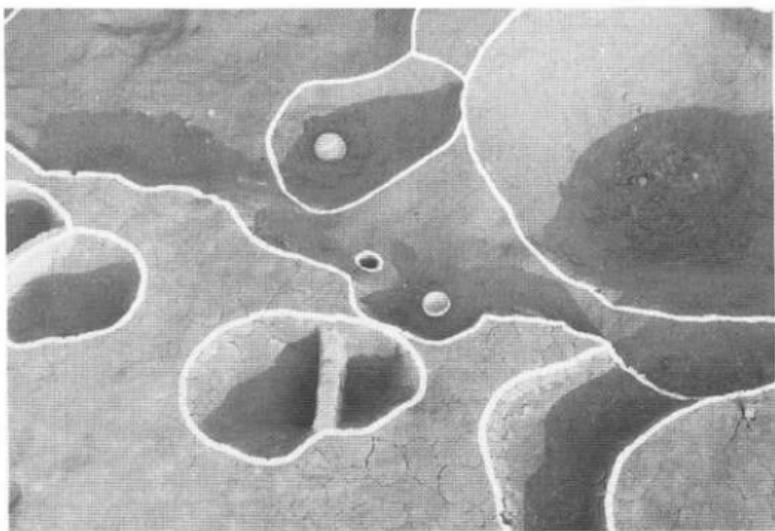
(上) 方形周溝墓-11検出状況（南から）



(下) 方形周溝墓-11土器出土状況（西から）



(上) SX-02検出状況（南から）



(下) SX-02出土遺物検出状況（西から）



(上) S X - 02土師器甕出土状況（東から）



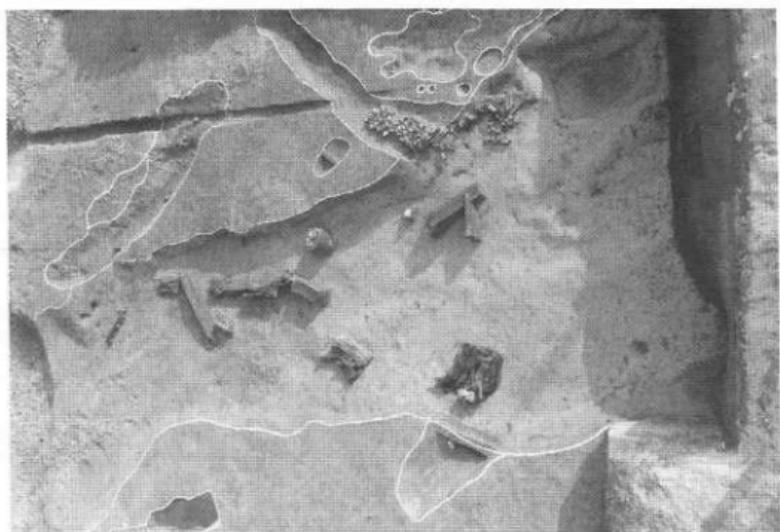
(下) S X - 02須恵器坏身出土状況（東から）



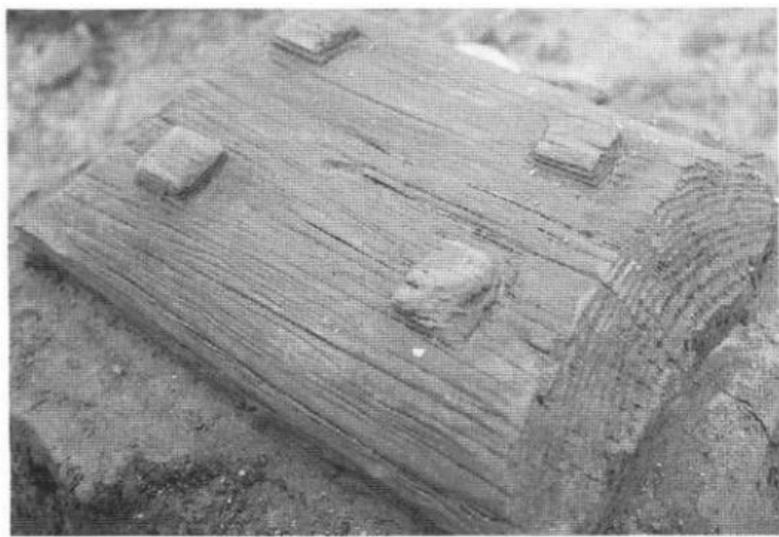
(上) SK-13検出状況（南から）



(下) SK-13盾形埴輪出土状況（東から）



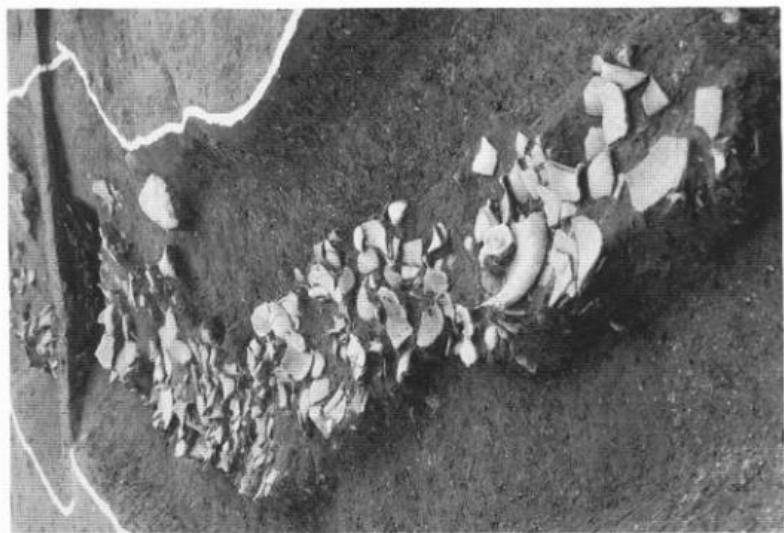
(上) 大溝 (SR-01) 検出状況 (全景)



(下) 大溝 (SR-01) 木製盤出土状況 (南から)

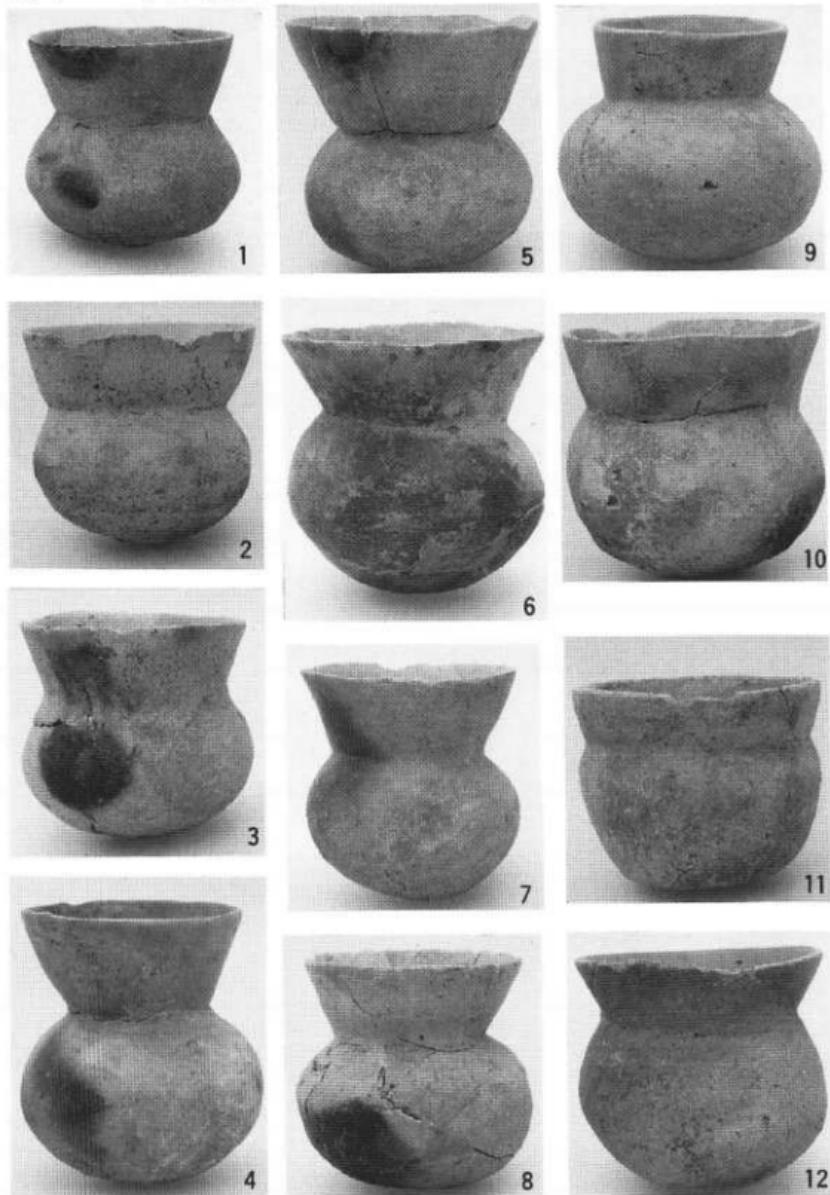


(上) SD-19土器群出土状況（北から）



(下) SD-18土器群出土状況（北から）

大溝（SR-01）埋土中層出土土器



倍賀遺跡（HK・90-1）出土土器(1)

図 大溝（SR-01）埋土中層出土土器

版

14



13



16



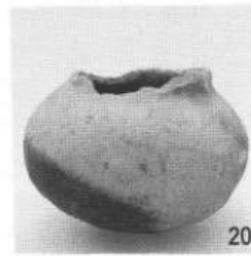
19



14



17



20



15



18



21



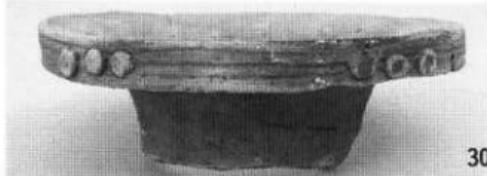
22



23

倍賀遺跡（HK・90-1）出土土器(2)

大溝（SR-01）埋土中層及び最下層出土土器



倍賀遺跡（HK-90-1）出土土器(3)

図 大溝（SR-01）埋土中層及び最下層出土遺物

版

16



31

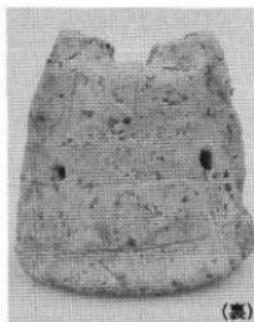


第20図  
(凸基有茎式石鎚)

銅鐸形土製品（第19図）



(表)



(裏)



(上部)



(左側面)



(右側面)



(内側)

倍賀遺跡（HK・90-1）出土土器(4)

大溝（SR-01）埋土中層出土木製盤

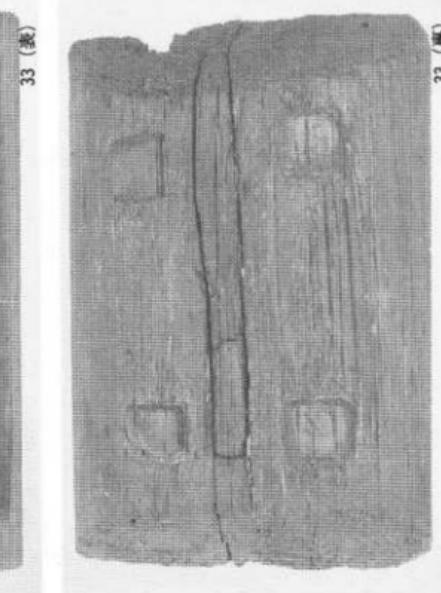
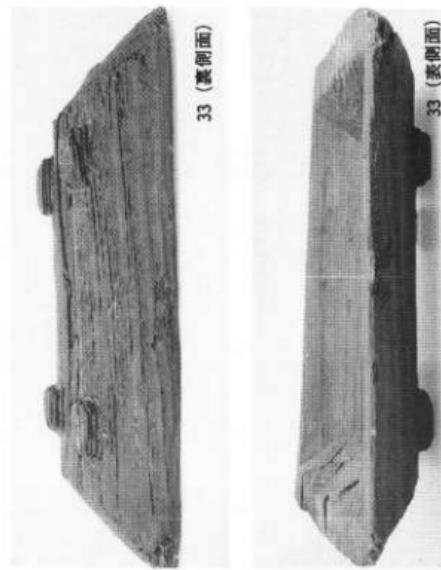
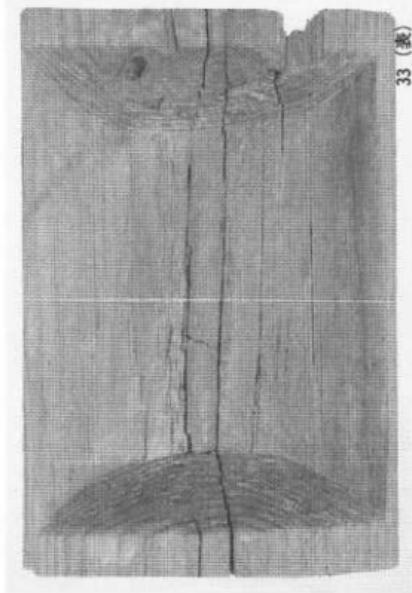
圖版

17

33 (蓋)

33 (蓋)

33 (表側面)  
倍賀遺跡（HK・90-1）出土木製品(5)

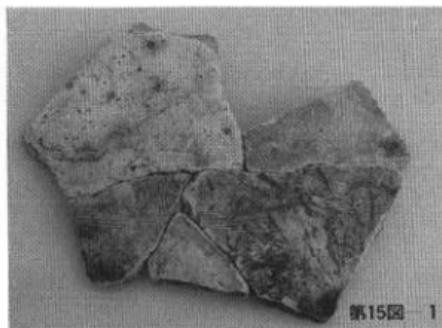




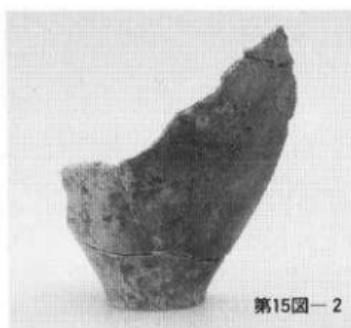
第15図-1



第15図-3



第15図-1



第15図-2

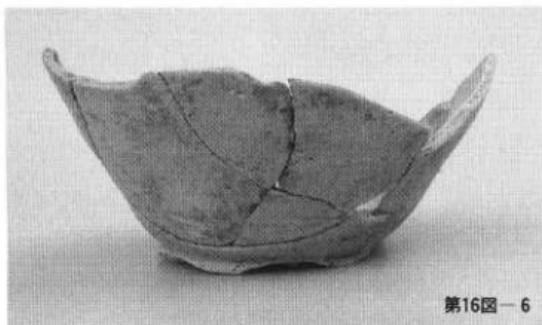


第16図-5



第16図-4

倍賀遺跡（HK・90-1）出土土器(6)



第16図-6



第17図-1



第17図-2

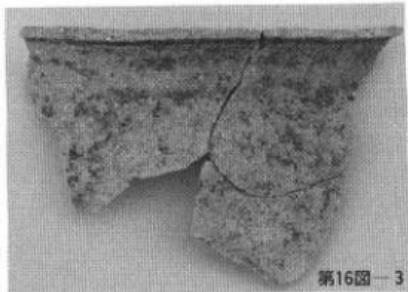


第16図-4



第16図-2

倍賀遺跡（HK・90-1）出土土器(7)



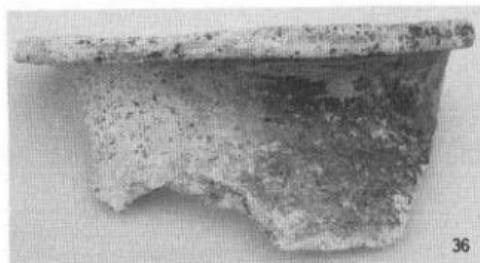
第16図-3



第16図-4



35



36



34(口縁部)



34(胴部)



31(底部)

**倍賀遺跡発掘調査概要報告書**

**-平成4年度 発掘調査概報-**

発行日 平成5年3月31日  
発行 茨木市教育委員会  
印刷所 西村印刷株式会社